

報告と考察：アメリカ先住民の宗教

—「ラコタ・スー族」を中心に—

神 徳 昭 甫

- I はじめに
- II 部族名の起源・由来
- III スー族の歴史
- IV 「メディスン・マン」は語る
- V サンダンス
- VI 結論
- VII 参考文献
- VIII 附録

I はじめに

筆者は、以下の通り、平成19年8月と、同20年8月の二度にわたって、アメリカ合衆国・サウスダコタ州の先住民スー族（ラコタ）の二つの保留区を中心に、実地調査を行った。（第一回目は「富山大学五福キャンパス国際交流活性化推進事業第1種海外派遣事業」の後援による）。

日時：①平成19年8月28日～9月14日

②平成20年8月2日～8月13日

場所：アメリカ合衆国サウスダコタ州パイニンリッジ保留区、およびローズバッド保留区

課題：アメリカ先住民の宗教研究

方法：①当地の「宗教的指導者」との面談、②宗教的儀式：サンダンスへの参加を通じて、その「宗教」の実態を探ること。

さて、数ある先住民保留区（現在、全米で322）の中から、筆者がラコタ・スー族を調査の対象とした理由として以下のことがある。同部族は「最後まで合衆国に抵抗した」勇猛果敢な

部族の一つであったこと——それは歴史的にも著名な、新旧二つの事件¹⁾によって証明されている——と、さらに文化的にも、合衆国当局による様々な弾圧をかい潜って、その民族的なアイデンティティを保持してきた²⁾ こと、である。しかし先ずは、この部族の起源、及びその部族名の由って来たとを明らかにしよう。

II 部族名の起源・由来

今日、サウスダコタ州の九つの保留地（レザベーション）に居住する部族³⁾ は、通常、スー（Sioux）族という名称で知られている。しかし元々、この名前は敵対するオジブエ族がアルゴンキン語で*nadowe-is-iw-ug*. “They are small adders (or enemies)” . “彼らは小さな蝮ども”（または“敵”）である」と言ったのを、フランス人がフランス式に ‘Nadouessioux’ と記し、さらに「それが ‘Sioux’ と縮められたもの」（祖父江452）である。しかしこの部族は自らを、オセッティ・サコウィン（*Oceti-Šakowin*. 「七つの同盟の火」の意）と呼ぶ、七つの氏族⁴⁾ が形成する同盟組織（*dakota*, 同盟, 友人の意）であった。これらは、テトン（*tetonwan*, 「平原の住民」）に由来、現在サウスダコタ州の西部に居住）、ヤンクトン（*ihanktunwan* 「端の住民」、現在のサウスダコタ州の中部、ネブラスカ州との州境近く、ミズーリ川の端に居住）、サンティー（*isanti* 「ナイフに住む」）に由来、現在のミネソタ州ナイフ湖近辺に居住していた）、という三つの支族に集合して、各々が社会的、政治的には独立した体制を保っていたが、経済的・社会組織、さらに宗教的信条においては類似していたため、歴史的、文化的な共通性を認識し、互いに相争うことは決してなかった。しかし当初、部族を束ねる共通の語であったはずのこの‘オセッティ・サコウィン’ という語は、やがて年月の経過とともに前述の‘スー’ という外来の蔑称に取って代わられるようになった。このような理由から浮上してきたのが、

-
- 1) 1876年、シャイアン族との連合軍は、モンタナ州リトル・ビッグホーンでの戦闘で、カスター中佐麾下の第七騎兵隊210名を全滅させた。この事件の報復として、政府軍は1890年、ゴーストダンスのためにサウスダコタ州ウーンディド・ニーに集合した、ラコタの老若男女300人を無差別に殺害した。それから83年後の1973年、ラコタの青年有志とAIM（全米インディアン運動）のメンバーから成る約300名が、合衆国政府に待遇改善を求めてウーンディド・ニーに立て籠もり、71日間、政府軍と攻防を繰り返したことは、今なお記憶に新しい。
 - 2) 合衆国政府は、先住民を「文明化」させるため、あらゆる面で彼らの文化の破壊を目論んできた。例えば、平原部族において広く行われて来た、サンダンスなどの儀式は「野蛮」だという名目で廃止を強制されたが、このラコタ族においては、インディアン局の監視を逃れて、今日まで秘かにこれを継続して来た。
 - 3) パインリッジ（オグララ・スー）、ローズバッド、ヤンクトン、ロアー・ブルレ、クロウ・クリーク、シャイアン・リバー、サンティー、スタンディング・ロック、シセトンの各保留地（図1参照）。
 - 4) テトン、ヤンクトン、ヤンクトナイス（この二つでヤンクトン）、メテワカントン、ワウベトン、シセットン、ワクベクテ（この四つでサンティー）の七氏族。このように、テトンやサンティーは単に集合的な用語であって、実在するバンド名ではなかったが、ヤンクトンの場合、実際の二つのバンドのうちの一つが支族を代表している。なお、テトンはオグララ、シカング、ハンクババ、ミニコオジュ、シハサバ、ウーヘヌンバ、イタヴィブコという名の五つのバンドより構成されている（Powers 13）。注11参照。

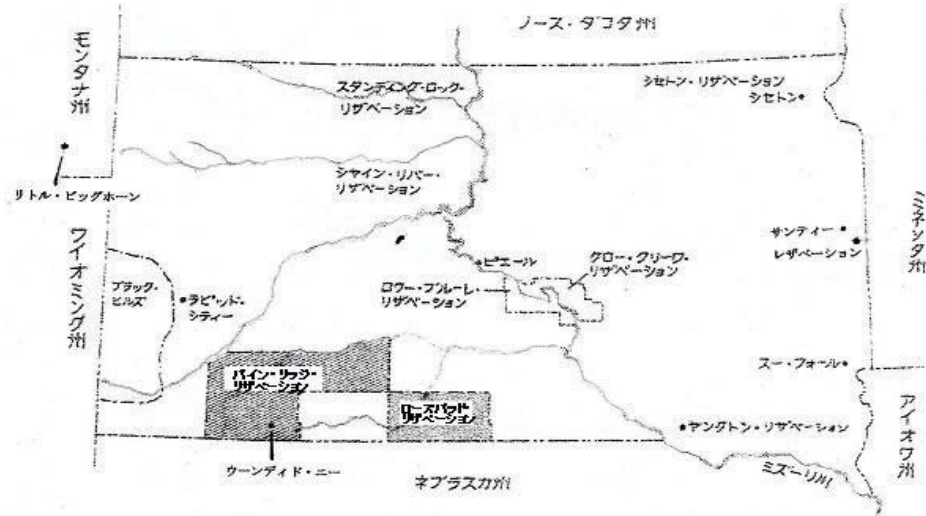


図1 サウスダコタ州先住民保留区

‘オセッティ・サコウイン’と同じく同盟を意味する*Dakota*という語であった。しかし三支族はこれをまぢまぢに発音した。すなわち、語頭を‘la’と発音し、自らをLakotaしたのがテトンであり、‘na’と発音しNakotaとしたヤンクトン、‘da’と発音し、Dakotaとしたのがサンティーであって、州名のサウスダコタ（あるいはノースダコタ）は、ここに由来している（Powers 3-6）⁵⁾。いずれにせよ、起源と指示範囲の異なるこれらの1) スー 2) テトン、ヤンクトン、サンティー 3) ラコタ、ナコタ、ダコタという三通りの呼称が時に混同されて使用されることから、今日、少なからぬ混乱を来している訳である。本研究の調査対象であり、現在、サウスダコタ州の西部に位置するパインリッジ居留区とその東隣りのローズバッド保留区に居住するラコタ族（ウエスタン・スー）は、ラコタ・スー、及びテトン・スー（Teton-Sioux）と呼ばれることもある⁶⁾。しかしまた、パインリッジというのは、部族政府、およびインディアン局が存在する単なる行政上の地名なので、旧来の地名、オグララ（oglala「自ら散らばる」の意味）を取って、オグララ・スー（Oglala-Sioux）と呼ばれる場合もあり、ローズバッド居留区もまた、そのバンド⁷⁾名の「シカンダー」（Sicangu）、もしくはブルレ（Brule）、あるいは「焼けた太腿」と（Bunrt Thighs）と呼ばれている。

5) と言ってダコタが標準語でラコタ、ナコタがその方言という意味ではない。なぜなら、文字による記録がない以上、原初（三支族に分かれる前）、どのように発音されていたかは誰にも分からないからである。
 6) 同様に他の二支族、ヤンクトンおよびサンティーもそれぞれ、ナコタ・スー（ヤンクトン・スー）、ダコタ・スー（サンティー・スー）となる。
 7) バンド（band）というのは、遊牧民族が移動する際に形成する群れや集団であり、部族（tribe）を構成する上での最小の単位である。ラコタの言葉では‘tiyospaye’でその訳はbandあるいはclanとなっている（*New Lakota Dictionary*, 2008年）

Ⅲ ラコタ・スー族の歴史

先史時代 スペインが新大陸に侵入して、大平原に馬が出現する17世紀以前の数百年間は、スー族における「先史」(prehistory)時代であって、記録らしいものはほとんどない。しかし、彼らの父祖の地と目されるのは、ミネソタ州中央部、北西ウイスコンシン州の森林であり、鹿を狩り、ワイルドライス、とうもろこしを栽培する農耕をも行っていたようである。

ヨーロッパ人との出会い スー族を最初に見たヨーロッパ人は、イエズス会のフランス人宣教師で、1674年のことだった(Bonvillain 100)が、それから数十年を経た18世紀の初め頃から、五大湖の西と、ミシシッピ河の上流あたりでフランス人商人との毛皮貿易が興り、先住民の各部族間では毛皮をめぐる抗争が始まっていた。スペリオリ湖辺りにいたオジブエ族が次第にミネソタに侵入し、その圧力を受けたスー族は、西へ南へと移動を始める。中でもダコタ(イースタン・スー)は、ほぼ真西へ向かい、ミネソタ州の南のミネソタ川、ミシシッピ河の沿岸に定住する。ラコタの場合、1700年から1725年の間には、既にレッド・リバーを越えて、ダコタ州東部に入っていた。これはバイソンなどの大型獣が豊富であることと、1650年には既に平原部族の間で馬が所有されていたことを他のスー族から聞き及んだためであるらしいが、彼らが騎馬生活を始めるのは1750年から1775年の間であった(Gibbson 3-4)。南に移動したヤンクトン・スー(ナコタ)もやがて、現在の位置、サウスダコタ州中央部(ネブラスカ州との境)のミズーリ川沿岸、アンデス湖付近に定住する。いずれにしても、既に1700年の終わりには、スー族の全部族は父祖伝来の地である、中央ミネソタと北西ウイスコンシンの森を離れていた。

馬と狩猟 かくして、馬を移動の手段としたラコタは繁栄し、部族員も増加の一途を辿り、19世紀までには他の全スー族を併せた総数を凌ぐほどになっていた。バッファロー(アメリカ・バイソン)は無限に生息するし、騎馬を利用した、彼らの遊牧生活、および戦闘形式は、平原の占拠を望むヨーロッパ系アメリカ人にとって最大の障害となって行ったのである(Gibbon 5)。

19世紀の前半、スー族の土地、資源の割譲を迫る合衆国側の要求はますますエスカレートして行く。1816年、合衆国とラコタ族の間で最初の「友好条約」が結ばれ、以後大きなものだけでも、四度の条約が締結されるが、そのたびにこの条約は反故にされ、破棄されて、ラコタ側は裏切られて行く。この間、南北戦争(1861～65)を挟んで1868年、第二回目⁸⁾のフォート・ララミーにおける条約で、テトン・スー族はサウスダコタに所有する、ほとんどの土地を白人側に手放して、自らのものとしては、ミズーリ川とサウスダコタの西部の間の土地のみが残された(Bonvillain 101)。

8) 1851年のフォート・ララミーの条約で、ラコタ側は、現在のサウスダコタ州内に所有する大半の土地を割譲するよう強制された(Bonvillain 101)。

ゴールド・ラッシュ 1869年、大陸横断鉄道が完成、大西洋沿岸の東部から太平洋沿岸へと向かう、西漸運動、すなわち、西部開拓に乗り出す、フロンティア運動はここにピークに達する。その途上にあるサウスダコタにおいても、ラコタ族が「聖地」とみなすブラックヒルズで、砂金が発見され（1874）、こうして、砂金採りに狂奔する白人が大挙押し寄せて、合衆国政府はラコタの土地の権利を無効にするに至る。また、平原部族の生活の手段を奪うため、バッファローの大量虐殺が始まったのもこの頃であった⁹⁾

リトル・ビッグホーン 1876年のリトル・ビッグホーンにおける激突には次のような背景があった。先住民にとって事態は益々悪化し、危機的な状況が続いていた。3月、アメリカ政府は、ラコタの全部族を拘束し、強制的に指定した保護区に入らせるよう騎兵隊に命令を出す、成功はしなかった。以後、合衆国軍および民間の自警団から組織される義勇軍は、多くの先住民の村を攻撃し、住民を殺害し財産を奪った。兵士と民兵は、先住民からあらゆる物を略奪する権利を認められたのである。この期間を回想する多くの報告の中から、オグララ・スーの精神的指導者、ブラック・エルク（1863～1950）が語った政府軍の攻撃の実態を引いてみよう。この襲撃は1876年3月16日、クレイジー・ホース（1842—77）¹⁰⁾率いるオグララ部落に対して行われた。

クレイジー・ホース一行は、パウダー川のほとりに約100戸のティーピーを建てて滞在していた。夜が明けると同時だった。雪嵐が吹き、ひどく寒い日で人々はまだ眠りに就いていた。と、突然、銃声と村の中に駆け入る軍馬の音が彼らの眼を醒ました。ワシチュ（アメリカ人）の騎兵隊だった。彼らは叫び、銃を撃ち、ティーピーに向かって馬を乗り入れた。村人の全員は、小屋から走り出て逃げた。彼らはまだ十分に眠りから覚めてはおらず、戦き切っていた。人々は崖の方に向かって逃げたが、兵士たちは、男女の区別なく、手当たり次第に殺して行った。それから、ティーピーに火を放ったり、打ち壊したりした。村人の一部が崖の前に逃れたとき、クレイジー・ホースが何かを言った。すると、オグララの戦士たちは「死の唄」を唱い始め、騎兵隊に向かって反撃を開始した。彼らは、オグララから奪った仔馬^{ポニー}を前に追い立てて逃走した。クレイジー・ホースは数人の戦士とともに、終日、これを追跡、奪われた馬を取り返して、村に戻った。（Black Elk¹ 90—91）

9) 白人の新大陸出現前には6千万頭から7千万頭いたとされるバッファローは、西部開拓が頂点に達した1880年代の中ごろまでに、その数は541頭までに減っていた。現在、合衆国に生存する35万頭のバッファローは、すべてこの時、生き残ったものの子孫である(<http://www.safari.co.jp/Animal/America/Bison.htm>)。

10) 111ページ、図12参照。

同年6月、オグララの戦士たちは、尚も繰り返される軍隊の攻撃から、それぞれの村を守った。彼らは、テトンの領土に向かう騎兵隊の一個部隊を途中、モンタナ州に足留めさせた。これに対して、アメリカ軍は、600人の兵士から成る救援部隊を派遣する。ジョージ・アームストロング・カスター中佐率いる、先の一隊は、モンタナ州リトル・ビッグホーンに野営していたテトンの村を攻撃する。このテトンの中には先述したオグララ・スーのクレイジー・ホースさらにレッド・クラウドという二人の酋長の他に、ハンクパパ・テトン¹¹⁾の著名な指導者シッテイング・ブル(1834～90)がいた。これらテトン・スーとシャイアン族との連合軍は、カスター軍を殲滅し、ここに戦いは、先住民側の圧倒的勝利に終わった。その広大な戦場跡は、この地に斃れた騎兵隊員が眠る墓地となり、先住民連合軍の勝利を記念するナショナル・モニュメントも建てられて、当時の激戦を偲ぶ縁となっている。



図2 リトル・ビッグホーンの戦場跡

合衆国軍の攻勢 しかし、テトン族とその同盟軍の赫々たる勝利も、さらなるアメリカ軍の攻撃を阻止することは出来なかった。この後、シッテイング・ブルとその一行はカナダへ逃れ、事態の改善を待ったが、やがて1881年、サウスダコタに戻り、7月19日、モンタナ州でアメリ

11) サウスダコタ州の西部に位置するラコタ族、すなわちテトン・スーは、前述のオグララ・スー、シカングーを初め、このハンクパパ(エンド・オヴ・キャンプ・ファイヤ〜「キャンプの環の端」)、シハサバ(ブラックフィート「黒い足」)、ミンコンジュー(流れの傍の耕作者)イタジボ(サン・アルク「弓なし」)、オヘヌンバ(トゥー・ケットル「二つの薬缶」)の七つのバンドより構成される(Glover 3)。

カ軍に降伏した。しかし、彼が望んだ平和が訪れる日は遂に来なかった。

テトンの各族長たちは合衆国への降伏を決意した。戦争を放棄すれば、彼らの民をさらなる迫害から守ることが出来ると信じたからであった。1877年、「合衆国役人の求めに応じたクレージー・ホースは和平交渉のために、ネブラスカ州のフォート・ロビンソンに赴いた。しかし、到着したクレージー・ホースは逮捕され、拘留されてしまう。彼は、一緒にやって来て白人のチーフと話をするだけで、危害は加えないと告げられる。しかし彼は騙された。彼らはこの後、鉄格子付きの牢獄に連れて行く途中で殺害しようとしたのである。それと察したクレージー・ホースは、ナイフを抜いて兵士数人に立ち向かったが、兵士の一人が銃剣で彼の脇腹を刺した。クレージー・ホースは倒れて死んだ。……この時、まだ30歳だった」(Black Elk¹ 142-143)。

既に触れたように1885年までに、平原からバッファローの群れは姿を消し、それとともに、平原部族の生活様式、一切をバッファローに依存した遊牧生活は完全に破壊された。保護区に制約され、しかも政府の配給に頼らざるを得ない、屈辱の生活がスー族を待ち受けていたのである。

保護区での生活 1888年、アメリカ政府の圧力に屈したスー族は、残っていた領土の半分、1100万エーカーの権利を放棄し、広大な「グレート・スー・レザベーション」は四つの保護区に細分化してしまった。それらはパインリッジ、ローズバッド、スタンディング・ロック、シャイアン・リバーと命名される。オグララはパインリッジ保護区に、ブルレはローズバッドに、ハンクパパはスタンディング・ロック、ミンコンジュウとイタジプコはシャイアン・リバーに、シハサパはシャイアン・リバーか、スタンディング・ロックのどちらかに、オーヘノンパはシャイアン・リバーとローズバッドの両保護区に居住することが定められた (Bonvillain 62-63)¹²⁾。

しかし保留地に収まったこれらスー族をさらなる悲惨な境遇に陥れたのが、1887年のジェネラル・アロッドメント・アクト「**一般土地割当法**」(ドーズ法とも言われた)であった。これは、先住民の保有する土地をさらに縮小、分割する目的で施行されたものであり、部族全体の共有財産であった土地を、強制的に各家族や個人に160エーカー、またはそれ以下の大きさに割り当てて、残った土地は白人の自由な購買に委ねようというものであった。この法律によって、先住民の「総保留地が、合衆国全体の土地面積に占める割合は、それまで、7パーセント、1億3800万エーカーだったのが、1934年にはその三分の一の4800万エーカーにまで激減した」(阿部² 24)のである。

ゴースト・ダンス 「ドーズ法」が施行された1890年、パインリッジ保護区で勃発した「ウンディド・ニーの虐殺」の直接の引き金となったのは、「ゴースト・ダンス運動」であるが、しかしその背景には、物心の両面において追い詰められていくラコタの人々の保護区での生活がある。ゴーストダンス教は、彼らが待ち望んだ「救い」であり、最後の拠り所でもあった。

12) 注11) 参照。英語表記において若干の違いが見られる。

「1888年、家畜が病気のために減少し、翌1889年、穀物の収穫は不作のため最悪であった。…続いて、麻疹、インフルエンザ、百日咳が流行し、致命的な結果をもたらした。…こうした出来事が彼らの精神にどのような影響を与えたか、いちいち証拠を挙げるまでもないであろう。ほとんど絶望的と言ってよい不機嫌で沈鬱な気分が、スー族の間に沈潜していった。そして1890年¹³⁾には、さらに完全なる不作と予想もしない配給食糧の削減¹⁴⁾という事態に見舞われ、インディアンは飢餓に直面することになった」(ムーニー 140—141)。

救世主現る、という噂を彼らが耳にしたのは、このような切迫した折りだった。西ネバダに住むウォボカ (ca. 1856 ~ 1932) というパイユート族の先住民が唱えた千年王国的な教えが、西北インディアンの間に燎原の火のごとく広まった。彼は1889年1月、皆既日食の折に、^{ヴィジョン}幻視を体験した。彼は天国へ行き、神を見たのだ。神は彼に告げる。「汝は、地上に戻り、我が言葉が汝が民に伝えよ。すなわち、銚をおさめて平和を取り戻せよ、と」。そこで、ウォボカは、自分の教える祈りと歌、新しい踊りを実践するなら、死んだ祖先や友が甦り、バッファローも再び地上を覆い、白人はすべて姿を消して、奪われた土地は回復するであろう、という神の言葉を彼の民に伝えた。この「教義」——福音——が多くの先住民を魅了し、彼らの心を捉えたのも、ある意味では無理からぬものがあつたらう。信者たちは、輪になって歌い、踊るうちに、その多くが狂躁状態に陥り、一種のトランス (意識の変容) の中で、死んだ祖先に出会い、バッファローの復活を幻視した。そのことから、この新しい宗教は「ゴーストダンス教」と呼ばれたのである。

ウーディッド・ニー ウーディッド・ニーは、インディアン ^{エイジェンシー}局 の置かれたパインリッジの北東約20マイルのところにある。道路の続く南側を除く三面を小高い丘陵地に囲まれた広大な平原で、東側には同名の ^{クリーク}小川が流れている。

ゴーストダンスに取り憑かれた男女に脅威を感じて、これを中止させようとする、白人の監督官たちの意向を無視して、西部スー族では尚も踊りは続けられたため、彼らは内務省に事態を報告、陸軍省へ軍隊の派遣を要請するに至る。軍隊の出動に怯えたラコタ・スーの人々は家を捨て、バッドランド¹⁵⁾ という荒れ地に避難する。12月25日朝、「偉大なメディスン・マン」、シッピング・ブルもグランド・リバー (パインリッジの西南40マイル) に向かって逃走中を

13) この年 (1890年)、合衆国国勢調査局は「フロンティアの終焉」を宣言した。

14) 「パインリッジにおける牛肉の供給量は1886年には812万5千パウンドであったのが、1889年には400万パウンドに減り、3年間で2分の1以下」(ムーニー 148) に激減している。なお、初期保護区時代の食糧配給は「ビーフ・イシュー」と呼ばれる生きた牛の配給であって、男たちは狩りに見立てて牛を追いかけ、女たちは肉そぎ器などの解体道具を持って、配給所にやって来た (阿部² 110) という。

15) Badlands. エイジェンシーの在るパインリッジ保護区から50マイル北西のところにある。何百万年間、風雨の侵食を受けて切り立った丘や尖った岩などの奇観が迷路のように、24万4千エーカーにわたって延び拡がる観光地。現在は国立公園に指定されている。

インディアン警察隊によって射殺された（ムーニー 167）。享年56歳。別の指導者ビッグフット（?～1890）に率いられ「メシアの到来に異常な興奮状態」にあった400人のバンドには、シッティング・ブルのバンドから生き残った者が加わった。一行は、バッドランドからパインリッジに向かって逃走中だったが、軍隊に取り囲まれ、降伏を覚悟した。彼らは軍隊の命令によって、1890年12月28日、途中、ウーンディド・ニーでティーピーを設営する。二個中隊（総勢470人）に相当する騎兵隊が周囲をぐるりと取り囲んでいた。「インディアンから武器を取り上げる」ために、配置されたのである。

大虐殺 翌、12月29日午前8時過ぎ、不意に戦闘が開始された。武器を引き渡すように命令されたオグララの「戦士たち」がティーピーに戻って銃を差し出すのに手間取った。こうして徹底的な「家探し」が始まった時、突如、一人の若者が毛布の下からライフルを取り出して発砲した。直ちに兵士たちは一斉射撃でこれに応戦し、戦士100名の半数が倒された。次いで正面（北側）の丘に据えられた四台のホチキス機関銃が、一斉に火を吹いて、容赦なく女子供の上に弾丸の嵐を浴びせたのである…。

野山には逃げ惑った婦女子の屍骸が累々と横たわっていた。ビッグ・フットの遺体とその天幕の周囲には、主に戦士たちの遺骸が群がっており、溢れ出た彼らの鮮血が、折からの吹雪中、降り積もった雪を真紅に染めていた。公式の報告で、死者は男性120名、婦女子250名、総計370名であったと記録されている。

アメリカ側は「最初の弾丸を発射したのはインディアンであったので、戦闘の責任はインディアンの側」にあり、「軍隊の一斉射撃による応戦および攻撃は当然であった」（ムーニー 185）としてこれを正当化している。しかし「女子供の大量虐殺には必然性がなく、弁解の余地がな」（同上）かった。明らかに「カスター部隊の報復」に他ならず、当時の人権団体も批判の声をあげた事件であった（阿部² 108）。



図3 ウーンディド・ニーの虐殺跡の墓地

いずれにせよ、この虐殺をもって、合衆国は「インディアン戦争」の終結を宣言する。翌、1891年、最後まで降伏を拒んで来たテトンの酋長、キッキング・ベアも合衆国の軍門に降り、ここにスー族の抵抗は完全に終わりを告げるのである。

分裂の兆し さて、かつては結束して白人の弾圧に抵抗したラコタ・スーの人々だが、保護区内での生活が始まった19世紀の後半から20世紀に及ぶ間に、それまで固い団結力を誇った部族組織も決して一枚岩のものではなくなって来た。「インディアン再組織法」(IRA: Indian Reorganization)を発端として、部族議会が発足した1934年以来、部族自治に向けて彼らは部族法の制定、部族議会の招集が緊急の課題となった(阿部²105)。ここにおいて、伝統を重んじ、ラコタの文化を守ろうとする「守旧派」に対して、アメリカ的価値を受け入れ、新しいライフスタイルを採り入れて行こうとする「近代派」——という部族内の対立、抗争が浮上して来た。極めて単純化すれば、前者は多く、民族的に純粋な、年配のラコタ人であり、読み書きも出来ない人々、後者は白人との同化が進む中で生じた混血児、およびアメリカ流の教育を受けた若い人々のグループ、という風に類別出来るかも知れない。とは言え、これら「民族的純潔度、年齢、教育の有無」という要素に加えて、「都市部」対「農村部」という要因も絡み合って、複雑な様相を呈しているのである。

第二のウーンディッド事件 こうした部族内の分裂を象徴するのが、1973年に起きた「ウーンディッド・ニー占拠」という事件であった(阿部²107)と考えられる。これに先立つ1972年、パインリッジでは、オグララ・スー部族会議の議長、および議員を選出する選挙が行われていた。議長として立候補したのは、ジェラルド・ワン・フェザーという守旧派、農村部を代表する人物と、近代派、都市部を代表するリチャード・ウイルソンという二人であった。結局、議長に選出されたのはウイルソンであったが、彼は選挙に勝つとすぐに、反対派の活動を妨害し、守旧派の弾圧に乗り出して、パインリッジにあるAIM(American Indian Movement)の組織の解体を図った。しかもこのウイルソンは議会の運営においても、使途金不明で私腹を肥やし、親類縁者などの身内を登用する、いわゆるネポティズムの悪評が立つほどであったので、AIMのメンバーを初めとする反対派¹⁶⁾は彼を弾劾し、更迭をする手続き(住民投票)を求めてエイジェンシーの監督官に訴え出た。しかしこの申し立ては却下され、しかもウイルソンは「ならず者」(“goon squad”)と呼ばれた私兵を使って反対派の弾圧に乗り出したために、これに抗議してウーンディッド・ニーの占拠に及んだのであった。ウイルソン議長はFBIの特殊部隊の出動を要請し、ここに71日間にわたる銃撃戦が展開して、世界の耳目を集めたのであった。確かにこの事件は、部族内の抗争から端を発したものであった。しかし、ウーンディッド・ニー

16) この人々の多くは、都市部出身の純粋なラコタ族で、学歴も高い、しかも「急進的」な守旧派の若者であったと考えられる。

という、その場所が持つ、歴史的象徴性によって、「第二のウーンディド・ニー」事件もまた、過去数百年に及ぶ、白人の数々の非道を糾弾し、さらに現在の不当な待遇の改善を求める手段として、またとない機会となったのである。

今、ラコタは さて、21世紀を迎えても、失業、飲酒、若者の自殺…等々、保留区に置かれたアメリカ先住民を取り巻く問題は山積している。サウスダコタに存在するスー族の九保護区においてもこれは例外ではない。いやむしろ、これらの事例に最も苦しんでいるのが、ラコタ・スーの社会であるとも言えるのだ。

様々な角度から、統計的な数字を引用しよう。2000年の人口調査によれば、現在、合衆国の人口は2億8142.2万で、先住民の総人口は約250万¹⁷⁾である。そのうち、スー族全体では15万3千人、チェロキー、ナバホ、チョクトーに続いて四番目である。保留地面積では、パインリッジ保護区は5番目(1,779,000エーカー)で、最大はナバホ(17,280,000エーカー)である。次に年間の経済状況(2000年)を見てみよう。

表1 ラコタ社会の所得状況 (Bonvillain 90)

保護区名	家族所得中央値	一人当たりの所得 (単位ドル)
スタンディング・ブロック	23,861ドル	8,636ドル
シャイアン・リバー	22,917	8,710
パイン・リッジ	20,449	6,128
ロアー・ブルレ	20,263	7,020
ローズバッド	18,673	7,278

表2 合衆国とサウスダコタ州の所得状況 (Bonvillain 90)

場所	家族所得中央値	一人当たりの所得 (単位ドル)
サウス・ダコタ	31,354	23,715
合衆国	46,737	27,203

表3 ラコタ社会の困窮率 (Bonvillain 91)

保護区	困窮家族の百分率	個人困窮率
パインリッジ	46.4%	53.5%
ローズバッド	45.9%	50.5%
ロアー・ブルレ	45.3%	48.3%
シャイアン・リバー	34.5%	38.5%
スタンディング・ブロック	32.6%	40.8%

17) アメリカの人口は2008年現在、3億423万人(米国勢調査局推計)で、先住民の人口もアラスカ、イヌイトも含めて275万2158人(2002年国勢調査による)となり、全人口の1%を越えている。

パインリッジ保護区における一人当たりの所得収入は、ラコタの五つの保護区の中で最も低い6.128ドルで、サウスダコタ州の一人当たり収入は、全米全体の27.203ドルに対して、23.715ドルとある。個人の困窮率としてパインリッジは53.5%、ローズバッドは50.5%を記録しており、全米の先住民保護区のワースト10の3位、2位を占めている。

表4 ラコタ社会の労働状況 (Bonvillain 92)

保護区	雇用率	失業率	非労働力の百分率
パインリッジ	34.3%	16.9%	48.8%
ロアー・ブルレ	43.5%	16.9%	39%
ローズ・バッド	46.1%	11.6%	42.3%
シャイアン・リヴァー	48.2%	8.6%	43.1%
スタンディング・ブロック	44.6%	6.7%	48.7%

表5 サウスダコタ州および合衆国の労働状況 (Bonvillain 92)

場所	雇用率	失業率	非労働力の百分率
サウスダコタ州	71.1%	2.9%	26%
合衆国	67.1%	4.2%	32.9%

次は雇用率と失業率であるが、パインリッジ保護区は前者が34.3%、後者が16.9%、ローズバッド保護区は、それぞれ、43.5%、16.9%で、サウスダコタの他の地域社会の平均が71%、2.9%、全国平均が67.1%、4.2%であるので、この問題において両保護区が如何に深刻な状況に置かれているかが、一目瞭然となっている (Bonvillain 89-92)。

さらに、飲酒の問題が健康を損ね、先住民の平均寿命が極めて低いことが指摘されている。2001年の人種別主要死因統計によれば、アメリカインディアンの死因のうち、自殺は321件で全死因の2.7%を占めているのに比べ、白人の場合、27,710件で1.3%、合衆国全体でも、30,622件で1.3%と同率である (阿部² 41)。筆者が今年 (2008年) 8月参加したローズバッド保護区で行われたサンダンスにおいて、部族の指導者はスピーチの中で若者の自殺率の高さを嘆いていた。統計的数字が示すように、働きたくても、その機会すら与えない絶望的な状況が、青少年から生きる希望を奪っていることが推測されるのである。

賭博場経営 最近、先住民社会において、こうした経済的状況の好転の兆しとしてカジノの経営¹⁸⁾の成功が挙げられよう。「2003年時点で330部族が、ロトくじ、ビンゴ、スロット、マシーンなど、何らかの賭博事業を行って」(阿部² 59-60) いるほどで、サウスダコタ州でも、

18) 先住民のカジノ経営は、フロリダのセミノール族が1979年に開いたことに端を発している。

スー部族が経営するカジノは、全部で九つを数えており、それらの多くがホテルやレストランを兼業している。筆者が訪れたのは、パインリッジ保護区内でオグララ・スーが所有する「プレイリー・ウインド・カジノ」のみであるが、なかなかの盛況ぶりであったし、若い男女が生き生きとして活動する職場でもあるとの印象を受けた。しかし、賭博場経営に関しては、青少年に与える影響を考えて、その健全さを問題視する向きもあると同時に、その収益は教育や福祉を充実させる重要な財源と看做す人々¹⁹⁾もあるように、カジノ経営は、先住民の中でも賛否両論を誘発しており、功罪相半ばするデリケートな問題であるようだ。



図4 パインリッジのカジノ



図5 カジノの内部（但し、プレイリー・ウインドとは無関係）

文化か経済か その他、筆者が経験した範囲で述べると、先住民の保護区でも、スーパー・マーケットやコンビニ、ガソリンスタンドを個人で経営する事業家も現れている。パインリッジでは、インディアン局の近辺に二軒、ローズバッドでもやはりインディアン・エイジェンシーの前に一軒のコンビニ兼ガソリンスタンドがあった。これらの例はむしろ少数であるが、地元産業を活性化する意味において注目すべき事柄であろう。

だが、こうした傾向は、なにも保護区経済に限らず、州全体の経済においても言えることである。サウスダコタ州においては小麦、トウモロコシの栽培、牧畜、飼料以外、特に見るべき産物はない。むしろ、先住民の文化遺産や、自然の景観をアピールする観光産業が中心なのである。その意味において、先住民自身が、パウワウなどの民族舞踊や、歌、さらにサンダンスなどの儀式をアピールして保護区産業を振興する余地は大いに残されていると言える²⁰⁾。

19) 次のIV「メディスン・マンは語る」で紹介するオグララ・スーの精神的指導者、メディスン・マンのフロイド・ハンドもそのような意見を述べていた。

20) シャイアン・リバー保護区では900頭のバッファローを飼育し、その肉を売る畜産業も行っている。

しかしそこにはまた、観光産業化に伴う必然的な結果として、彼らがこれまで維持して来た純粋な民族文化を破壊する、世俗化の可能性を有しており、これまた、決して一筋縄ではいかない大きなテーマとなっている。



図 6 パインリッジにおけるパウワウ（2008年8月）

IV メディスン・マンは語る

ラコタ・スー族の“メディスン・マン”三人とのインタビューの内容を以下に一問一答の形で再現してみる（ただし、質問の内容は全員同じではない）。インタビューは以下の順序で行った。

フロイド・ハンド 六十八歳（パインリッジ保留区）

ブッチ・アーティチョーカー 六十七歳（ローズバッド保留区）

キース・ホース・ルッキング 四十四歳（ローズバッド保留区）²¹⁾

質問一 あなたは、メディスン＝マンとしてどのような活動をおこなっていますか？

——（三人とも）ワカン・タンカ（偉大なる精霊）と人々との間の「翻訳者」として、医療活動や、日常生活において様々な人から相談を受けている。スエット・ロッジやサンダンスな

21) 筆者が今年（2008年）8月に参加したサンダンスを主宰したメディスン・マン。ただし、年齢は三人とも2007年9月当時のもの。

ど儀式を主宰している。

質問二 メディソン・マンとしての仕事以外にどんなことをしていますか？

——もう、私は老人だからね（ハンド）。昨年まで七年間経済開発技師をしていた（ブッチ）。地元の高校でラコタの言語と文化を教えています（キース）。

質問三 これまでの活動の中で特に顕著な業績を挙げて下さい。

——癌の治療（三人とも）。治癒率30%（キース）。

質問四 この保護区ではメディソン・マンは何人いますか？ また「メディソン・ウーマン」はいますか

——十人。女性は四年前一人いたが、今はいないと思う（ブッチ）。三人。女性はずっと前に一人いた（キース）。

質問五 あなたはどのようにしてメディソン・マンになったのですか？

——初めから決まっていた。私はレッド・クラウドの子孫だが、叔父のフルズ・クロウに直接、その使命を伝えられた（ハンド）。山に行って夢を見た。白馬の精霊が、なれと言った（ブッチ）。先祖クレイジー・ホースの霊魂が私に告げたのだ（キース）。

質問六 あなたはすべての儀式の前後に“ミタクエ・オヤシン”（「すべてはわが親戚」の意）を唱えるのですか？

——その通り（三人とも）。でもこの言葉は“アーメン”のような祈りの言葉ではない。一九六〇年の「公民権運動以降」に復活したものだ（キース）。

質問七 どのようにして“ヴィジョン”（幻視）を得ましたか？

——ビジョン・クエストで白馬の精霊を見たのだ（ブッチ）。夢に先祖が現れたのだ（キース）。

質問八 あなたの守護霊は何ですか？

——「ミラクル」という白い子バッファロー（ハンド）。原初の石であり、ホース・ピープル（馬族）である（ブッチ）。私の先祖のクレイジー・ホースとハイ・イーグルだ。（キース）。

質問九 最後に、ラコタ族、あるいは先住民の宗教を世界の宗教の中に位置づけるとすればどうなりますか？ というのは、我々日本の神道の“カミ”という概念は“ワカン・タンカ”（神秘の大霊）によく似ているように思うからなのです。また、「スエット・ロッジ」という儀式も、“祓え”とか“浄め”によく似ているように思うのですが。

——ラコタ（先住民）のものは宗教ではなくて、生活の一部である。1992年に多くの日本人が来たし、チベットのダライ・ラマもここにやって来て、話し合ったことがあるが、仏教やラマ教とは違うのではないか（ハンド）。独自の発展を遂げたと思う。それは自然を極めて重視する宗教で、人間の魂は星から来たが、肉体は大地から生まれたと考える（ブッチ）。われわれのヴィジョン（幻視）は人々を癒し保護するためにやって来るものだ。確かに日本から二人の仏教の僧侶が私のところにきて話し合ったことはある（キース）。



図7 フロイド・ハンドと守護霊：白い仔バッファロー “ミラクル”



図8 フロイド・ハンドの祖先・レッド・クラウド



図9 ブッチ・アーティチョーカー



図10 ブッチの守護霊ホース・ビートル



図11 キース・ホース・ルッキング

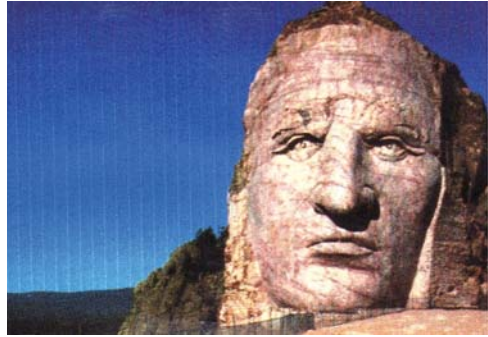


図12 キースの祖先、クレイジー・ホース（クレイジー・ホース・メモリアルより）

ラコタの宗教 さて、彼らメディスン・メンとのこの対話を通じて、「ラコタ」の宗教について如何なる「結論」が導き出されるであろうか。

ヘーゲルの『宗教哲学』（1925）²²⁾によれば、キリスト教、イスラム教、仏教という三大宗教と呼ばれる、組織化された教団と数多くの信者をもつ宗教²³⁾が、「世界宗教」（普遍宗教）と呼ばれているのに対し、古代に自然発生した、民族固有の宗教は、「自然宗教」と呼ばれている（仁戸田135-168）。その中には、エジプトやギリシャ、ローマなどの偶像崇拝的な多神教、日本の神道²⁴⁾や、韓国、モンゴルなどの北方・中央アジア起源の、呪術をこととするシャーマニズムも含まれる。これらは、宇宙に遍く霊の存在と、その浮遊、運動を考えた古代人の「宗教」（あるいは宗教意識の源）、アニミズム（精霊崇拜）から発展した（タイラー 122）とされる。アメリカ先住民、あるいはラコタ族の宗教は、これらと共通点を持っているのか、あるいは異なるものであろうか。

ラコタ社会が信奉する“ワカン・タンカ”（「神秘の大霊」）は決してキリスト教のような「一神教」の神ではない。その精神世界は、自然界のあらゆるものには靈魂が宿るとするアニミズ

22) 岩波書店版、ヘーゲル全集（木場深定訳）『宗教哲学』中巻の一（昭和30年）、二（昭和32年）、下巻一（昭和42年）参照。

23) これらの宗教の母胎は、ヤーヴェや、アッラー、大日如来が、それぞれ、モーゼ、ムハンメド、釈迦という、特定の人物（教祖・予言者）に真理を開示したことから創まった「啓示宗教」であり、その点において、「教祖を持たない」神道やヒンドゥー等の民族固有の古代宗教と異なる。ただし、仏教の場合、事情は異なる。こうした考え方は、7世紀末、仏教の衰退期に成立した密教の教義によるもので、元々「仏教思想の原点には神」という観念は「存在していなかった」し、「本来ブッダとは法（ダルマ、真理）を体得した人間が達する境地で、釈迦は、真理を捉えたひとりの先覚者に過ぎなかった」（村上重良33,80,81）。

24) 我が国では、「邪馬台国」の卑弥呼は鏡を用いて光を自在に操る「巫女」（シャーマン）であったと言われるように、いわゆる「はらい」や「みそぎ」などを特徴とする、ヤマト政権下の日本の原始神道は北アジアのシャーマニズムに強い影響を受けて、発展した（村上重良13-14）。現代日本のシャーマニズムに関しては拙論：「恐山のイタコ：報告と考察一闇の中の開眼一」『富山大学人文学部紀要第24号』2006年8月、55-70を参照。

ム的な観念の横溢する領域であり、ワカン・タンカはすべての創造者ではあるが、もっとも強力な一者に過ぎない。従ってそれは「多神教」の世界である。

また、メディスン・マンの果たす役割も、シャーマニズムの定義「通常、トランスのような異常な心理状態において超自然的存在（神・精霊・死霊など）と直接接触・交流し、この過程で予言、託宣、治病行為などの役割を果たす人物（シャーマン）を中心とする呪術—宗教的形態」（佐々木41）の中に含まれる“シャーマン”の定義に合致している。質問—に付随して、回答者の一人、ブッチ氏は、「ノストラダムスほどではないが」と前置きしながらも、自身の予言能力を認めていたし、しかもそれが“イメージ”を伴うものであると述べており、これはアイヌのシャーマンが持つ「ウエインクル」（千里眼・予言能力）に酷似している（本田79-80；201-214）。

以上より、ラコタ族の宗教の実態は多神教であり、シャーマニズムであると言えよう²⁵⁾。ただし、彼らはキリスト教に比して多神教や、シャーマニズムを劣った宗教とみなす欧米中心の宗教学や人類学を受け入れるのを拒む傾向にある。それは十七世紀初めの白人の侵入以来、先住民が味わい、被ってきた、諸々の屈辱や辛酸を考えれば納得いこうというものである。このように“シャーマニズム”という用語自体が適切かどうか、議論の余地はあるものの、しかし現今においてラコタの宗教が、この名前の下に一括、統一されるのは致方ない事実であろう。彼らの民族的起源がアジアにあるという定説²⁶⁾もそれを裏書きしていると思われる。

前述したように、ギリシャ神話の神々、日本の神道や、ヒンドゥー教などの民族固有の宗教は、元来、自然崇拜に基づく、多神教である（本文79頁）。そしてラコタ、さらに言うなら、アメリカ先住民の宗教もまた、そのような特徴を備えていることは、これまで述べて来たことから明らかであろう。ただし、ギリシャの神々や日本の八百万の神々は、自然現象や、人間を取り巻くあらゆる事象が擬人化され、さらに神格化された人格神であるのに対し、ラコタやアイ

25) ただし、十七世紀後半以来、キリスト教（特にこの地方においてはフランス人宣教師によるカトリック）の布教や、十九世紀以来合衆国政府が実施してきたミッションスクールによる全寮制教育によって、改宗した先住民も多い。たとえばキース氏自身カトリック教徒であることを認めていたし、ハンド氏の守護霊である白い仔バッファロー「ミラクル」も、カトリックの神の子羊、聖母マリアの影響が濃厚である。このように、現在のラコタの宗教にはキリスト教との融合・混濁という要素も若干見受けられる。

26) アメリカ先住民の起源については、最後の氷河期とされる七万年から一万年前の期間に四回ほど氷結したベーリング海の陸橋を渡ってアラスカにやってきたモンゴロイドである（富田24-25）という説が長い間定説となっていた。つまり、一万二千年前の気候の温暖化によって氷が解け始め、以後アジアからの徒歩での渡来は不可能になったが、内陸部においてはカナダ西部、ロッキー山脈東側を覆っていた氷床が解け始め、回廊が出現して通行が可能になり、それから人々の南下が始まり、ほぼ一千年の間に南米大陸の最端にまで到達したと考えられた。しかしここ三十年の間に、アメリカ合衆国の東海岸沿いに、この定説を覆すような一万二千年前よりも古い遺跡が次々と発見されてきた。最近の遺伝子研究もまた、ヨーロッパや他の地域からの移住説を補強するような結果となっている。とはいえ、これら先住民の大部分が、アジアから移住してきた古代人の子孫であることに関しては疑う余地はない（阿部² 12—13）。

ヌの「神々」は、むろん、擬人化された面はあるものの、未だアニミズム的な、自然の面影を濃厚に残したカミ、あるいは神格 (deity) に近い。一方、キリスト教における神・ヤハウェは、当初パレスチナ地方の天候神であった頃、さらにはモーゼに顕現した折りに、「我は有って有るもの」(「I AM WHO I AM」 「出エジプト記」 3:15) と名乗って、奴隷の足枷からユダヤ民族を解放し、彼らの崇敬の対象となった(「啓示宗教」の)時代から、やがて、キリスト教として全世界に広まり「普遍宗教」となっていく、その過程において次第に洗練され、かつての人格的側面²⁷⁾ はかなりの部分、捨象され、抽象的な存在にまで昇華されて来た感じは否めない。このような進化論的、発達論的な観点から、ヘーゲルを嚆矢とする19世紀的宗教学は、キリスト教を最高の宗教、「絶対宗教」としたのであろう。とは言え、我々の身体に「猿」時代の名残りである、尾骶骨があるように、「最も高度な文明を享受している筈の現代人の精神にも、アニミズムは残存する」(タイラー 122) し、「シャーマン的な信仰と技術の残滓は、インド・ヨーロッパ人の間にも発見できる」(エリアーデ 6) のである²⁸⁾。

V サンダンス

前項IVでは、ラコタ族の精神的指導者メディスン・マンの三人にインタビューを行い、彼らとの質疑応答から引き出した結論として、筆者は、ラコタ族の宗教とは、シャーマニズムであるとの結論に到達した。この項においては、彼らメディスン・マンが地域社会において実践する活動の一つである、サンダンスを取り上げ、その実態を述べ、その特質を検討していこうと思う。

宗教とは何か、という問いに対して答える言葉はさまざまであろう。しかし、未だ經典という、文字化された「教義」を持たない、ある特定の宗教を考えた場合、平素、教祖が提唱する教えが、具体的な、眼に見える形を取った数々の「儀式」、および、信徒が日々実践する「活動」そのものが、その宗教の本質であると考えられる。

殊に文字を持たず、記録を残して来なかったアメリカ先住民の場合²⁹⁾、実際に彼らの身体を使って演じられる「儀式」(祈り・歌・踊り)こそが、時代を経て、また、個々の指導者によっても、若干の改変はなされて来たとしても、最も純粋に原初の形を繰り返し再現して来た——生きた「過去」——として、いわゆる「教典」に勝るとも劣らない貴重な資料であ

27) この神は、ユダヤ民族が自分以外の神を信じたりすると、嫉妬し、激怒し、懲罰を加えたりして、はなはだ人間的な面が強かった。

28) このような言説を裏付ける証拠として、私は以下の例を挙げておく。アメリカ合衆国ではペンシルバニア州のパンクサトーニを初め各地で、毎年、2月2日の「聖燭祭」(グランドホッグ・デー)において、穴から出てくるグランドホッグ(マーマット)の影の有無・長さによって春が来たかどうかを占っている。また、ごく最近、裁判において、陪審員の意見が6対6で割れたために判決できず、籤引きによって決着を付けたという話もあった。

29) 「啓示宗教」と違って、教祖がいない点でも、他の多くの民族固有の「自然宗教」と共通点を有している。

る³⁰⁾と考えられるのである。

聖なるパイプ ラコタには「七つの儀式」があるとされる。その起源を知るには、彼らの神話「聖なるパイプ」に拠らなければならない。

イクチエ・オヤテ（真の人間）にとっては飢餓と艱難辛苦の時代であった。バッファローの狩りも、うまく行かなかつたし、小さな獲物も少なかった。ある日、二人の男が一緒に狩りに出て、丘の上にやって来ると、はっきりとは分からなかったが、西の方から何かが近付いてくるのが見えた。最初、それは一頭のバッファローに見え、次には一人の人間のように見えた。その姿は近付いて来て結局、両手に何かを抱えた、美しい女性だと分かった。この女性が近寄って来た時、二人のうちの一人は、これは「聖なる生き物」(Holy Being)だと分かったので、そのままじっと立ったままで、待っていた。もう一方は、この女性を見て欲望を抱き、前に進んで彼女に抱きつこうとした。その瞬間、一朵の雲がこの男と女を包んで姿を隠してしまった。雲が去ると、女が一人立っているきりで、地面には骸骨が倒れていた。

それから、この女は、もう一人の若者に話し掛け、部族の許に帰り、西の方向に向かって小屋を建て、柔らかい土で祭壇を準備して、私が行くのを待つようにみんなに言いなさい、と告げた。

若者はジグザグに走って露営の村に駆け戻り、知らせを持って帰ったことを皆に話した。何人かの首長や長老たちに起こった事を述べた。彼らは即座に女の言った通りに小屋を建てた。日が昇る頃、女がやって来て村に入り、小屋の中の客用の席に座った。首長が、彼女を妹として、また、聖なる生き物からの使者として挨拶をし、スイートグラス³¹⁾の三つ編みを水に浸した飲み物を差し出すと、女はこれを受け取った。

女は、自分は妹であり、彼らを救うために送られて来たのだと語った。それから、彼女は、こう付け加えた。「これから斥候を出して狩りの準備をしなさい」。斥候はバッファローの大群を見つけて、村の方向に追い立てた。人々は必要なだけのバッファローを殺したのだった。

次に、女は人々に向かって話し掛け、持って来たパイプを彼らに見せた。それは、バッファロー^{ビープル}族からの贈り物であり、祈りを上げる時、また和睦を結ぶ時に使うようにと語った。彼女は女たちには、妹が語るように話し掛け、みんなはワカン・タンカに選ばれた人々であるから、悲しみと愛を感じ、家族を愛し大事にすること、亡くなった人々の霊を慰めるようにと語った。子供たちに向かっては、みんなは大事にされているのだから、「聖なる生き物」と聖なるパイプに敬意を払い、それらの二つに相応しい者にならなければならないと語った。

30) 従って、先住民の儀式は、多く神話・伝説の領域と重なり合う。

31) 甘味があり、飼料にされるイネ科の植物。ドショウツナギ、コウボウとも言う。

また男たちには、兄に対して話し掛けるように、村人を守り、食べ物を与えてくれるパイプの使い方を教えたのだった。

パイプにタバコを詰めながら、彼女は赤い石の受け皿は身体のようなもので、地上のあらゆる良いものが詰まっていることを語った。パイプの軸の間から漏れ出てくる煙は、祈りの時に捧げる息である。タバコに火を点けながら、彼女はワカン・タンカの住処である空に向けて、大地、マカに向けて、四つの方角のそれぞれに向けて、また四つの風に向けてパイプを差し出した。

女性は、パイプを首長に廻しながら、こう言った。「さて、私は与えられた任務を果たしましたので、出て行きます」。彼女は小屋を出たが、誰にも同行を許さなかった。人々は彼女が出て行くのを眺めていた。小屋の外に出ると、その姿は消えて、代わりに、白いバッファローが丘の上から走り去って行った。

この部族の人々は今でも、ウーペ（仲介者）たる、ホワイト・バッファロー・キャフ・ウーマン（白いバッファローの乙女）が教えた通りに、パイプを使っているし、サンダンスの式典のたびに、彼女はダンスの指導者として、また聖なるパイプの守り手として、そこにいるのである（Walker 135-136）。

ホワイト・バッファロー・キャフ・ウーマン この神話の成立年代が、果たしていつ頃のことかははっきりしていない。しかし、この「ホワイト・バッファロー・キャフ・ウーマン」（白いバッファローの乙女）には、カトリックの聖母マリアの影響も指摘されていることから、それほど遠い時代ではなく、おそらく、白人宣教師との接触の始まった17世紀後半以降のことと考えて差し支えあるまい。ともかく、「聖なるパイプ」を通じて、現在、ラコタ（スー）族が執り行っている、次の七つの儀式は、最初の二つを除いてすべて、この女性が伝えた事になっている³²⁾。

- (1) スエット・ロッジ（イニカガピ）
- (2) ヴィジョン・クエスト（ハンブレイチャ）
- (3) サンダンス（ウイ・ウァンヤグ・ワチピ）
- (4) ゴースト・キーピング（ワナギ・ユハピ）
- (5) フンカ
- (6) 初潮の祝い（イスナティ・アウイカロワン）
- (7) ボール投げ（タパ・ワンカイェヤピ）

(1) この儀式は、参加者に聖なる存在の中に入り、そこから出てくるための準備をさせるためのものである（ハーツ66）。従って、以下の六つの儀式の前、中、後に限らず、先住民が大事な機会には常に行う、あらゆる儀式に先立って、“身を浄める”基本的な儀式である。

32) 「最初の二つの儀式は、それ以前からあったと言う人もいる」（阿部¹ 137）。

(2) 一人で人里離れた自然の中に出向き、断食をして、精神的な導きをもたらす幻視が訪れるよう祈りを捧げる（ハーツ66）。

(3) 毎年、夏至の頃、平原地方の先住民の間で太陽崇拝と関連して行われている行事。炎天下の「四日間をほとんど飲まず、食わずで太陽に向かって踊り続けるこの儀式は、ワカン・タンカ（大霊）への、肉体と魂の供犠である」（阿部¹ 184～216）。ラコタ族から始まり、他の平原民族に広まった、とされる。

(4) 亡くなった人の霊を受け止め清めて、ワカン・タンカのもとへ清らかな状態で戻れるようにするために儀式（ハーツ66）。

(5) 身内の契り。部族の成員の間で互いに結束力のある関係を結ぶための儀式（ハーツ66）。

(6) 女の子が女性としての聖なる義務と責任を学ぶ儀式（ハーツ66）。

(7) 人々はこの宇宙を象徴するボールをキャッチしようとする。かれらの奮闘は、人間が無知を克服しようとする努力を象徴している（ハーツ66）。

かつては人生の節目に当たって必ず行われた、というこれらの儀式は、まさにラコタ・スー族の宗教の精髓^{エッセンス}であり、彼らの「思想を体現する」ゆえに「学びの指標」（阿部¹ 137）でもあったのだ。

サンダンス (1) のスエット・ロッジは別にして、これらの七つの儀式の中でラコタの宗教的特徴をよく示して、最も重要なのがサンダンスだと言えよう。しかもこの儀式は毎年、6月から8月の間、ラコタ社会のどこかで必ず行われている³³⁾。しかし同じく、夏のほぼ同じ時期に行われる、民族舞踊の祭典「パウワウ」が、最近、余りにもオープンになり、賞金付きのコンテストとして一種のショーと言えるほど、俗化しているのに反し、サンダンスは数多く行われてはいるが、しかし世俗とは一線を引き、それとあくまで妥協することのない、高い「精神性」を保っている。

第一、その斎場（祭儀が催される場所）が、俗塵を厭い、人里離れた場所で行われることが多い。かつては合衆国政府の弾圧を恐れて、秘かに「地下に潜って行われた」（“went underground”, Mails 5）という歴史そのままに、未だに一種「秘境」とも言えるほど人目に付かない場所を「選んで」行われている、という気がする。さらに、部族以外の外部の人間に対して、見物はオープンではあるが、パウワウとは異なり、カメラやビデオ・ムービーなどの持ち込みは一切、厳禁されている。その場でのスケッチも、メモも禁止されるほどの念の入れ方で³⁴⁾、昔ながらの、いわば「秘儀」と言えるほどに、その純粋性を維持しようとしているかに見える

33) 「1994年夏は、ローズバッド保護区だけでも17のサンダンスが行われた」（阿部¹ 188）。

34) 従って、以下に記す私の記録もホテルに戻ってから、就寝前に急いでメモしたもので、思わぬ記憶違いによる遺漏部分や、記述した事柄の前後関係においても、若干の異同なしとしない。

のである。

[第一日目]、トリー・デイ (Tree Day) (2008年8月5日火曜日)。

午前3時半、筆者はネブラスカ州ヴァレンタインのホテルを発って、サンダンスの行われるサウスダコタ州のローズバッド保護区内、セント・フランシスへと向かった。周囲はまだ完全に闇に閉ざされている。強い雨脚がフロントガラスを叩く中、前方の西の空を時折、紫の稲妻が走る。約1時間半後、車はセント・フランシスのインディアン・ハイスクールの校内に着いた。

しかし、そこは、サンダンスの斎場ではなかった。そこから南へ2.5マイル、さらに西へ2マイル、さらにまた、北に1マイル上った所だと判った。途中からは、舗装もされていない悪路に変わり、文字通り、野を越え、谷越えしながら、私は迷路のように紆余曲折した秘境の地に辿り着いたのである。この土地は、このサンダンスの主催者、メディスン・マンのキース・ホース・ルッキング³⁵⁾が所有する広大な野原であった。普段は放牧されているのだろうか、牛糞がそこら中の地面に転がっている。直径15メートル位の大きな円の内側には、セージの葉が切れ目なく蒔かれて、サンダンスが始まれば以後、ダンサー以外は誰をも中に入れない「結界」の役目を果たすのである。その外周は、ちょうどブドウ棚か、藤棚のような形で、松の枝葉を載せた亭(日除け)^{アーバー}が巡り、サポーター(見物人)の席となる。円の中央には祭壇(バッファローの頭蓋骨から成る)が供えられている。その傍に掘られた穴は、これから聖なる樹、^{はこやなぎ}白楊(cottonwood)を立てるためのものである(87頁、図14参照)。

この円形の祭場を取り巻くように、ティーピーが何十となく設営されていた。これらは、三本の支柱を軸に数本の木を交叉させ、その上にフェルト布を張って出来たもので、かつて平原インディアンが暮らした移動用の、円錐形テントである。私が到着した時、雨はまだ、降り続いていた。夜明けの太陽とともに始まるはずの「聖なる樹」の設立は大幅に遅れていた。



図13 平原インディアンの住居 ティーピー

35) 前項IVの「メディスン・マンは語る」で、筆者がインタビューしたメディスン・マンの中の一人。

四時過ぎ、キース・ホース・ルッキングのアナウンスがあった。「これから白楊を伐りに行く。皆、後に続くように」。先導するキースの車の後に、30台ほどの車列が続いて行く。10マイル近く走って、両側に鬱蒼とした木立が続く道の片側に車を停めた。メディスン・マンが一年も前から探すという、その白楊の樹は、太くて真っ直ぐの幹を持ち、しかもその幹は、途中で二又に枝分かれしてはなくてはならない。こうして選ばれた大樹にまず、パイプを向け、樹の霊に対して伐採の許しを乞い、祈祷を捧げた。それから東西南北にパイプを向け、同じように祈った。こうして、大きな斧を使って切り倒していくのだ。最初に部族の未来を担う、男女二人の子供が斧を入れ、次いで7、8人、この地区の有力者と思われる男たちが、入れ替わり立ち替わり、斧を打ち込んで、とうとう、樹は横倒しになった。それから、男たち十数人が、切り倒された白楊を車に乗せて、再び斎場に向かって車を連ねて戻って行く。

六時。こんどは60～70人の男女が総がかりで、円の中央の窪みまで運んで行くのだ。私たちは、その両側に並んで「聖なる樹」を迎えた。

この樹の二又のところに、横木がさし渡されて、ちょうど、十字架のような形になった。そこから、赤、白、黄、黒、四旒の旗³⁶⁾が翻った。何本かの紐が結ばれ、それぞれの紐の一方の端が踊り手の手や胸に繋がれた。

太鼓が鳴り響き、歌が唱われ、平原に流れて行く。踊り手たちは軽く、ステップを踏んで円の中を時計回りに進んで行く。二時間後、この壮巖にして、感動的な「聖なる樹設営」の儀式が終わったとき、既に夜の9時を回っていた。

この日、設立された白楊は、サンダンスが続く、それから四日の間も、微動だにせずそこに立っていたのである。

[第二日目], サンダンス第一日目 (8月6日水曜日)。

早朝、六時。ようやく東の空が紫に染まる頃、アナウンサー、フランク・アンドリュウの低音^{バス}が突如、聞こえて来た。「ドラマーよ、ダンサーよ。位置に着くんだ」。この言葉とともに、メディスン・マンを筆頭に、ダンサーたちが西の入口のすぐ後ろのアーバー(休憩用)を出て、円の周囲を取り巻く私たち観客^{サポーターズ}の外側を進んで行き、東の入口の前に整列した。朝日が昇って来た。ドラムが鳴り響く。全員が東に向かい、今や灼熱の陽射しを投げ始めた日輪に面して遥拝の礼を取るのである。こうして、いよいよ「ワカン・タンカへ捧げる肉体と魂の供犠」(阿部¹⁸⁶⁾サンダンスが始まった。

36) 四つの色は、世界中の人種、赤は先住民、白は白人、黄はアジア人、黒はアフリカ人を表しているとされるが、同時に四つの方向(黄=東、白=南、黒=西、赤=北)をも示す。Ⅷの図21 メディスン・ホイール参照。

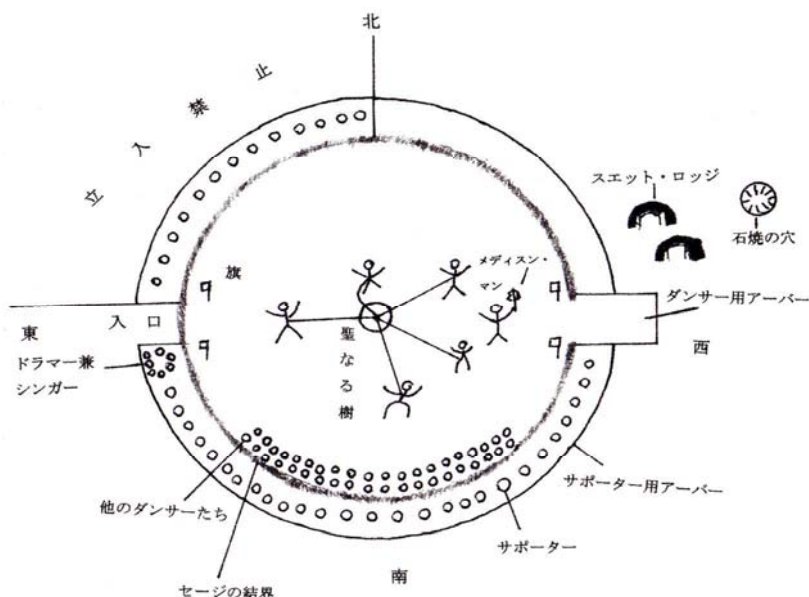


図14 サンダンスの斎場³⁷⁾

祭場に入った踊り手 (pledger「プレッジアー、請願者」とも言う) は、前日の最後にとった
 ボジション
 構図を再現した。すなわち、前夜、聖なる樹に繋がれた踊り手たち (piercer)、男5人、女2
 人には再び紐が結ばれ、残った40人近い男女のダンサーは、七人のドラマー兼歌い手の打つ、
 強烈なドラムのビートと歌³⁸⁾に乗って、ゆっくりとステップを取りながら時計回りに円の中を
 進んで行く。シンガーズの歌が「大霊よ、お慈悲を下さい」(ワカン・タンカ、ウンシマラ ヨォ)

37) 作図に当たっては、阿部珠理『アメリカ先住民の精神世界』p.186を参考にした。

38) サンダンスの歌は全部で18ある。そのうちの初めの二つは「入場の歌」で、踊り手が聖なる踊り場に入
 り、行進を始めたときに唱われる。その最初のものには歌詞はなく、ドラムのみ、2番目は「斑ワシの歌」
 (“Song for the Spotted Eagle”)である。「斑ワシよ/おまえは言った/これから行く、とそう言ったのだ
 /やって来るぞ今。やって来るぞ、今に」。3番目の歌：「祖父よ/私は祈ります/聞いて下さい/宇宙に向か
 かって/私は祈ります/聞いて下さい/家族とともに/私は生きて行きます/私はそう言っているのです」。

この3番目(4番目には歌詞が付いていない)と、5,6番目の歌は踊り手がピアシングを行う時に
 唱われる。5番目：「大霊よ/私にお慈悲を下さい!/私は生きて行きます/だからこうして苦しんでいる
 のです」6番目：「大霊よ/私にお慈悲を下さい!/私は生きたいのです、だから/こうして苦しんでいま
 す/助けて下さい!/私は苦しんでいます」。3,5,6番目の出だし「祖父よ」(トゥンカシラ)、「大霊よ」
 (ワカン・タンカ)のところは、すべての踊り手が諸手を挙げて太陽に祈願する箇所、 “トゥンカシラ”
 と “ワカタンカ” は同義語として使われている。

7番目の歌は、二人の男女の出会いと、結婚、やがて夫の戦死という、悲劇的な別れの歌：「死ぬほ
 ど愛した人がいました/そうです、もう一度、あの人に逢いに行きます」。8番目以下は省略。四日間に
 わたって、これらの歌が繰り返して唱われるのである。歌手兼鼓手はカリフォルニアやナバホなど、様々
 な地域の人たちによって——白人、日本人も参加していた——1回ごとに交代して演じられる。

という3番目と5,6番目の歌の冒頭の部分「祖父よ、私は祈ります」(トゥンカシラ、ホエ
ワインクテ)、「大霊よ、お慈悲を下さい」(ワカン・タンカ、ウンシマラ ヨォ)に来ると、
ダンサーの全員は太陽に向かって一斉に両手を挙げる(注38参照)。

先住民の間では七と四の数字が^{ホーリー・ナンバー}聖なる数として大事にされるように、サンダンスにおいても
一回一時間続くダンスが、一日に^{セヴン・セッションズ}七回^{ワン・セッション}演じられる。また、一回において、中央の樹に繫
がれた踊り手たち(ピアサーズ)が、樹の前まで進み出ると、また離れていく、この動作を繰
り返すのが、四回。この間に、二本の紐の先に取り付けられて、直接ピアサーの両胸を^{ベッグ}挟む串
が遂には胸から切り離されてしまう。ピアス(pierce)つまり、「突き通」された串が肉を断つ、
という行為が、サンダンスを構成する数々の要素のうちで最も重要な意味を持っている。した
がってサンダンスは“piercing ritual”とも言われているほどなのである。ダンサーの胸から
肉が断たれるとき、パチッという音が聞こえ、同時に血潮がパッと飛び散る³⁹⁾。この「苦行」、
肉体的苦痛によって、彼らは何かしら、ヴィジョンを得る、と考えられているわけだ。これが
成功した時、つまり、肉が切り裂かれたとき、周囲を巡るいずれかのダンサーの中から「オロ
ロロロ」という怪鳥の鳴き声にも似た奇声が発せられる。

さて、これらの踊り手の扮装について述べよう。25名前後の男子は、10歳前後の子供から60
を超えた年配の人も若干混じていたが、いずれも上半身は裸、腰から下はちょうど大相撲の
化粧廻しのような——無地もあれば図柄入りの者もあったが——赤かブルーを基調にして、黄
色でアクセントを付けた^{いろどり}彩も鮮やかな布(ただしこれは、後ろにも同じ布が回されてスカート
のようになっている)で覆われている。右手にはゴールデン・イーグルの羽飾りが先端に付い
た長い棍棒、左手に煙草パイプ(50センチ以上の長い柄がついている)を握り、また両の手首
には、リストバンド(セージの葉を赤い布で巻いた物)が、両の足首にも同様のバンドとガラ
ガラが巻かれており、口に「イーグル・ボーン・ホイッスル」(先に付いたワシの羽が伸び縮
みする笛)を咥えて、絶えずこれを吹き鳴らしている。足は素足か、モカシンを履いている。
頭は鷲の羽根を二本、両耳の上に挿したヘッドバンドを被っていた(Ⅷの図15参照)。

女子のプレッジャーは、15,6歳の少女から50歳までの15名から構成されて、この他に聖樹
からの紐を両肩に繫いだピアサーが2,3名いた。彼女たちの衣装は、上半身はショールとい
うローブ(上着)を纏い、腰から下は男性と同じ腰布を着用している。これらもまた、色彩に
富む美しい衣装であるが、四日の間に別の衣装に着替えた女性もあった。頭には、鷲の羽根を
両耳の上辺りに挿したセージの花糸を巻いている。右手は鷲の羽根の扇(ちょっと車の埃払い
に似ている)、左手は長い柄のあるパイプ(50センチ以上)を握る。足はモカシンを履くか、

39) そのため、各ダンサーの両の乳首の上には、日本で実施されるツベルクリン反応の注射の後のような
痕が点々と残っており、以前、ピアシングが行われたことを示していた。

素足だが、この場合でも、必ずセージのバンドを足首に巻いている（Ⅷの図16参照）。

ある事件 これらが四回繰り返され、男5人のピアサーのうち、3人がピアシングに成功して解放されたところで休憩となり、ランチの時間となった。この時、私の身に起こった事件は直接、サンダンスとは関係はないが、ラコタの文化に関わる、ある重要な側面を示しているため、以下に詳細を記す。食堂のテーブルに着いて、私がピザパイの食事を摂り終えた時だった。一人の男が向かいの席に腰を下ろして、握手を求め、自己紹介を始めて、自分もこの集落のチーフの一人、誰々だと言う。ところが、途中から風向きが変わって変な雰囲気になった。「オマエは隠れて写真を撮っただろう、オレには分かっている。カメラを見せろ。フィルムは抜き取らねばならん」。もちろん、身に覚えのないことだから、私は即座に否定したが、うっかり、車の中にカメラがあるから、疑うのなら調べて見ろ、と言ってしまった。その後、カメラはホテルに置いて来た事を思い出して、いや、カメラは持っていない、と訂正した。これが悪かった、オマエは嘘つきだと言い始め、こちらの言うことをまったく信用しなくなった。ともかく、車の中を調べさせろ、と言い張るので、中を点検させた。むろん、見つかりようもない。それでも、今迄にもう、オマエは三度、嘘を吐いた、等と言う始末。主催者のキースのティーピーに連れて行き、「身の潔白」を訴えたが、“You are a liar.”と言って埒が明かないので、遂にコチラの堪忍袋の緒がキレた。“You are liar !”（オマエこそ嘘つきだ！）と怒鳴って、その場を飛び出した。

この事件は、一言でいうなら、異文化同士の接触によって発生した誤解、衝突の一例であるが、そこには、彼ら、ラコタ族のサンダンスに対する認識が如実に反映されていると見ることが出来る。サンダンスは近年、オープンになってはいるが、もともと秘密裏に行われて来たし、閉鎖的な側面を完全には払拭していない。それを純粋に保ちたいということは、彼らがそれだけ重要だと見做していることに他ならないだろう。彼らの土地や財産も、バッファローも、言語も習慣も、すべてが合衆国政府によって奪われ、消滅した。彼らに残されたものは、サンダンスを初めとする「七つの宗教儀式」のみなのだ。言わば、彼らが誇るたった一つの財産、文化遺産が、外部からの人間の不実な行為（写真撮影・録音など）によって汚され、消滅してしまうことを彼らは何よりも恐れ、警戒しているのであろう。

いささか、穿ち過ぎた、酷な見方かも知れないが、私は「降りかかった火の粉」を振り払い、以後も、この人々との交流を続けて行くためにも、そのように考えて、自分を納得させたのであった。

この日、午後のセッションは、6回目と7回目にタバコ・レスト（タバコ休憩）があったが、私は身心ともに疲れ果て、7回目のセッションは見ず、ホテルへ戻った。

[第三日目], サンダンス第二日目（8月7日木曜日）

男女5人のピアサー（男3人、女2人）が中央樹に繋がれ、前日（二日目）の最後の構図を

再現したところから、三日目が始まった。まだピアシングを終えていない二人の女性はそのまま紐に繋がれ（これは最終日まで続いた）、年配の男性一人を残して、二人が新しい顔触れに変わった。西の出口から40人のダンサーが、その周囲を巡って踊りながら行進する。中央の白楊の近辺では新たに男が一人、背中に紐を繋がれている。その横合いで数人の男たちがロープを引っ張り、彼を中央樹の中頃の高さまで巻き上げた。宙吊りになった男は何度も激しく地面に落ちたが、なかなか、ブレイクには至らない。やがて、その体の重みと、体を揺する衝撃とで、遂に肉は引き裂かれて、彼は下に叩き落とされた。その時、「オロロロロ」という奇声が発せられた。このピアシングはその後、人を変えて、二、三回繰り返された⁴⁰⁾。

午後は、結婚式、養子縁組の式が行われた。この最後の儀式が終わると、ダンサーたちが勢揃いして、新しい人生を始める若者を祝福する。この時、バッファローを真似た異形の男が東の入口から斎場の中に飛び込むや、踊り手と正反対の方向、左回りにグルグルと乱舞し始めた。ヘヨカと呼ばれる道化の登場だ。彼は、何でも人と反対のことをして、このラコタ社会の価値観を破壊し、新しい文化を創造するトリックスターを体現している。

5時半、すべてが終わって、私はその場を離れた（9時からナイト・ダンスあり）。

[第四日目], サンダンス第三日目（8月8日金曜日）

この日の中心は、ヒーリングダンスと呼ばれ、①身体が不自由の人たち数人②円の外側のアーバーに居並ぶ、我々サポーター全員のための“癒し”の儀式である。

[午前中] この日も、やはりピアサーの男女4人、その周囲を40人のプレッジャー（ダンサー）が取り囲んで廻って行く。背中にペグで挟まれた男、2、3人が、中央樹から宙吊りになってピアシングに挑戦する。

新たなピアサーが数人、順繰りに登場した。八個のバッファローの頭蓋骨⁴¹⁾を二本のロープに繋ぎ、ペグで背中に結び付け、グルグルと何周も円の内側を廻って行く。その背中、二つの肩甲骨の上にも、かつて肉が引きちぎられた痕跡が幾つか残っている。介添え役のダンサーが手に持った鷺の扇で風を送ったりして、励まし勇気を与えている。ピアシングの成功を促すために、ダンサーの他に、常時数人のサポーター（いずれも女性）が、シーダーの香木を焚いた容器（こちらの炭入れによく似ている）から出る煙を、手で煽ぎながらピアサーに送っている。（この人々は円の外側のアーバーに並んでいる、我々サポーターの間も巡回しながら、芳

40) この日の特記事項として次のことを述べておこう。サンダンスの休憩時に、私は長老格のダンサーの一人に指名されて“パイプ・フィリング”（パイプにタバコを填めること）の役目を仰せつかった。これは、「パイプの廻し嘸み」のことであり、あるダンサーから預かったパイプを持って、サポーターの間を廻り、数人にタバコを勧める役回りなのである。この時、パイプを渡す者、受け取る者の双方が「ミタクエ・オヤシン」（すべては我が親戚）と言う言葉を交わす。

41) VIII 図17参照。

香を振り撒いてくれる。) 四周したところで、このピアサーはブレイクに成功した。

【午前中】最後のセッションでは、一人の白人青年がピアシングに挑戦した。彼は初日からダンサーとして参加していた人物であった。この男、ロープが胸に繋がれた瞬間、聖なる樹から発する靈力に打たれたのであろうか、その場に何度もヘナヘナとへたり込んだ。皆が傍から鷺の羽根の扇で煽ぎ、シーダーの煙を振り撒いたりして励ます。そして四度目、今度は足をしっかりと踏ん張りながら立ち上がり、胸を逸らした。この時、青年の口から裂帛の気合が発せられるや、その胸から紐がけし飛んだ。肉が弾け飛ぶと同時に、血飛沫が飛び散り、滴り落ちた真っ赤な血潮がその白い胸を染めて行く。

【午後】ヒーリングの儀式が始まった。まずは前方のアーバーの一角を占めた数人の身体が不自由な人たち、次いで我々サポーターの全員の身体を4,50人のダンサーたちが、イーグルの羽根の扇で撫でて通った。鷺は先住民が聖なる鳥と仰ぐ鳥で、強い靈力をもっていると信じられている。その後で、ダンサーが手分けをして何かの実を挿り潰したもの——葉だという——をバケツに入れて持ち運び、配って回った。私も分け前に与り、口の中に入れて味わった。栗の実だった。

最後に、ドリーマーたち、ヘヨカ二人に加えて、二つの角がアンテナのように突き出た四角の白い仮面を被った、大人しい道化、エルク(^{へらじか} 笹鹿)も三人登場した。ヘヨカは例によって逆回り、エルクは時計回り、ともに円の中をクルクルと縦横無尽に乱舞しながら進んで行く。ヘヨカの一人は、滑稽な動作、時には多少猥褻な身振りをしながら、見物人の笑いを誘って行く。もう一人のヘヨカは水桶を抱え、中の水を柄杓で掬っては皆に振りかけている。私もまた、このヘヨカから、したたかに冷水を浴びせ掛けられた。逃げる暇はなかった。

【第五日目】、サンダンス最終日(8月9日土曜日)

七人のドラマー兼シンガーが位置に着いた後、この日、朝、一番に行われたのは、初日と同じく太陽に向かっての遥拝であった。今、まさに東天を昇らんとして文字通り、「日の出の勢い」にある、真夏の太陽が、輝かしい曙光の輻を投げ始めたそのさ中、メディスン・マンに先導された50人近いダンサーたちは、我々、サポーターが並ぶアーバーの外側を通過して、東の門に勢揃いした。こうして、サンダンス最後の日が始まったのである。

第1セッションは、男2人、女1人が中央樹に繋がれたところからスタートした。この三人のピアシングはまだ終わっていなかったのである。残る全員が、彼らの周囲を踊りながら廻って行く。

午前中は、二回のセッションが行われて、三人を繋ぐロープはすべてブレイクして、ピアシングは完成した。

午後は、ゲストの二人のスピーチから始まった。一人は私と、このサンダンスとの仲介役を務めてくれたロニー・タイス、著名なインディアン文化研究者であり、彼自身、民族舞踊パ

ウワウのシンガーでもある。二人目は『サンダンス——スー族の偉大なピアシング儀式——』(1978,1998)⁴²⁾の著者、トーマス・E・メイルズ。三人目に、この保留区の長老、このサンダンスの主宰者キース・ホース・ルッキングの伯父が、彼ら先住民の置かれた状況を語り、殊にこのローズパッドにおける若者の自殺率の高さを嘆いていた。

次いで、家族の結束を固める儀式、フンカが行われた。この人々は、このサンダンスのダンサーの中でも殊に目立った動きを示した、若いカップルの家族であった。

ユウィピ^{ユウイピ} その後に演じられたのはユウィピ (Yuwipi. “they wrap him up” (「彼らはメディスン・マンを包む^{くる}」の意) という、実に奇妙な儀式であった。枯れ木を組み合わせて作った木枠⁴³⁾ (体操の平行棒のように、長さ2メートル位の二本の木を1メートルの間隔で平行に並べ、それぞれの木の両端と真中の三か所から短い三本の木を直角に差し渡し、また、それらと垂直に交差する短い二本の棒、全部で六本の短い棒＝高さ50センチで支えたもの。その六ヶ所の接合部分は、紐で固定されている)の真下に、キルトの袋ですっぽり包まれたメディスン・マンが転がされる。彼はやがて、自力で袋を外し、木枠の下から這い出る、というものである。これは、中央の樹のすぐ傍、祭壇近くで演じられた。

この儀式もまた、「癒しの儀式の一つで、いろいろの変形がある、そのすべては暗室で行われた。……この儀式の続く間、人間、動物、鳥、さらには無生物の霊が部屋に入り込んでメディスン・マンに病人がどのようにすれば治癒するかを教える」(Powers 144)のである。暗室ではなく、これは白日の下で演じられたので、ユウィピ儀式の変形の一つ、という訳だが、このように、すべてがメディスン・マンによって取り仕切られるため、サンダンスにおいては、個々のメディスン・マンによって、多少の違いが生じるのである。

さて、儀式のフィナーレは、これまでの総決算というべきものであった。何人ものダンサーが新たにピアシングに挑戦し、白楊の枝から宙吊りになった。何人もの男がバッファローの^{スカル}髑髏を紐で運んだ。彼らの胸や背中肉が千切れ、鮮血が飛び散った。成功のたびに、あの「オロロロロ」という奇声が聞こえてきた。

最後の最後、私に水をぶっ掛けた例のヘヨカが一人だけ、円の中に取り残された。彼は聖なる樹から宙吊りにされ、ジタバタともがきながら、ついにロープはブレイクして、道化は地面に落下した。

祭儀が終わった後、私たちサポーターは、それまで通り抜けが禁止されていた、東の入口から西の出口の間のアーバーの外に並んで、ダンサーたちを待っていた。

終宴 かつてのラコタの勇士さながら、壮麗な鷺の羽根飾りを頭に被った七人の^{チーフ}族長が横一

42) Thomas E. Mails, *Sundancing, the Great Sioux Piercing Ritual*, 1978,1998

43) 伐採した白楊の枝から葉を耂り取ったもの、と思われる (VIII, 図18参照)

線に整列した。メディスン・マンのキース・ホース・ルッキングが鷲の羽根飾りの扇を振り下ろすと、彼らの口から一斉に、あの「ホー、ホー」という雄^{おたけ}哮びが発せられた。東の入口を出た50人のダンサーは、キースを先頭にして、居並ぶ私たちの方へ向ってくる。こうして私は、彼らが演じ抜いた、この四日間の苦行を労い、感謝の言葉を伝えながら、その一人一人と固い握手を交わしたのである。

午後8時半、私がこの斎場を後にした時、日は完全に落ち、辺りは既に暗闇が立ち籠めていた。空には星が幾つか瞬いている。

「再び、この地を訪れることがあるだろうか」。私は自問自答しながら、ネブラスカ州に向かってアクセルを踏み込んだ。

VI 結論——アメリカ先住民の宗教

サンダンスの意義と特徴 既に触れたように、サンダンスはラコタにおける「七つの儀式」⁴⁴⁾の殆どすべてと、結婚式、養子縁組などの風習がそこに凝縮された、「儀式の中の儀式」ともいべき重要な祭儀なのである。なぜなら、斎場（聖なる環）に入る前、必ずダンサーたちは、スエット・ロッジで身を清めてから登場するからである。さらに、かつては、彼らの中には、自分の肉体を極限の苦痛にまで追い込んで、ヴィジョン（幻視）を得ようという、目的を抱いている者をも含んでいたことは、ヴィジョン・クエストの目的とも重なり合っている。また、フンカ（家族の結束の儀式）、ユウィピも今回行われたことは既に述べたし、私は参加出来なかったが、「ギヴ・アウェイ」（give-away与え尽くし）⁴⁵⁾も初日、樹木設定の後に行われている。サンダンスの第一義は、前述したように「大霊、ワカン・タンカ⁴⁶⁾への肉体と魂の供犠」（阿部¹⁸⁶⁾）であるが、太陽への讃歌を捧げる儀式でもあり、人間を取り巻く自然界すべての霊に対する感謝を述べる祭儀でもある。ここにおいて、参加した踊り手（請願者）は自分一人の健康や家族の健康、長寿のみでなく、この地域社会、部族全体の繁栄をも大霊や諸霊に対して祈願するのである。「サンダンスの歌」の四番目の歌詞にある「祖父」とは、ラコタ語で *thunkasira*（トゥンカシラ）、すなわち、大霊ワカン・タンカを意味している。

44) puberty（初潮）、ボール投げ、ゴースト・キーピングの三つの儀式は、ここでは行われなかった（ただし、pubertyは他のサンダンスでは行われている）。殊に最後のものは、「死」という、時期を選ばぬ突発的な出来事の直後に行われるものであり、また、真夏の「太陽讃歌」のこの祭典に相応しくあるまい。

45) この儀式は、先住民の間では、ほぼ共通に行われているが、「ミタクエ・オヤシン」（すべては我が親戚）というラコタの思想を実践したものとも言える。注40) 参照。

46) アルゴンキン族のマニトウ、イロクオイ族のオランダなど、この大霊に相当する言葉は、各部族によって異なるが、いずれも「偉大なる神秘」、「偉大なる聖霊」の意味である（ハーツ30）。このように、アメリカ先住民の生活環境や風習は、地域によって若干、異なるが、本質的な宗教観においては、ほぼ一致していると見做してよい。

大霊 私は、先住民のこうした「自然崇拜」、「多神論」の宗教観が、アメリカ文学の、殊にアメリカ・ルネッサンスの時代（1830～1860年頃）、一世を風靡した思想、超絶主義⁴⁷⁾に与えた影響は少なくないと考えている。その超絶主義運動の指導者、エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803～82）は、彼の全思想の根幹を成す「大霊」（Over-soul）について、次のように述べている。

一つの^{ソウル}魂がある。
それは全世界と関連している。
芸術はその反応である。
科学はその方法を模索する。
文学はその記録なのだ。
宗教とは、その魂が引き起こす尊崇の情動である。
倫理とは、人間の生において例証されるこの魂の謂いだ。
社会とは、我々個人が相互の中に見つけ合うこの魂の謂いだ。
商^{トレード}とは労働によって自然の中にこの魂を見出すことである。
政治は力の中に具現された、この魂の活動である。
作法^{マナーズ}は魂が仲介する静的な表現だ⁴⁸⁾。

エマソンの長男エドワード（Edward Emerson, 1844～1930）によれば、エマソンの思想は、このOver-soulへの信仰を根幹に据えたところから発展して行くのであり、またその痕跡は『日誌』の中に如実に表明されている⁴⁹⁾としている。

エドワードは、これらの^{モットーズ}標語における「大^{オーヴァー・ソウル}霊」は、後に東洋思想、ヒンドゥー教のブラ

47) トランセンデンタリズム（transcendentalism）。超越主義ともいう。カント、コールリッジ、カーライルなどヨーロッパの哲学者、文学者、およびインド哲学の影響を受けて起こったと言われる。ピューリタニズムやユニタリアニズムなどの既成の宗教に反抗して、人間の内面の神聖さや、神、自然との交流、個人の無限の可能性など、人間の明るい側面を強調した。また、日常的経験を「超絶」した直観による真理の把握を訴えた（渡辺631）。同じロマン主義でも、ホーソーやメルヴィルのペシミズムに対峙する、ロマン主義の楽天的な面を代表する。エマソン、ソロウら、ボストン付近の一群の文学者、宗教家によって1820年代に提唱され、後に、この思想の実践を目的として、ボストン郊外に実験的な共同村の建設という、社会改革運動にまで発展した。1840年代後半、この共同村は火災によって崩壊し、改革は失敗に終わる（斎藤8-14）。

48) Edward Waldo Emerson, 380

49) 同上。

フマー⁵⁰⁾ という形を取って表現される、と付け加えている。しかしながら、私は、前述したように、お膝元のアメリカ先住民の「宗教」を無視しては本質を見失うことになると思う。先今、我国でも流行している「千の風になって」（原題 “Do not stand at my grave and weep”）という歌⁵¹⁾ は、通常、メアリ・エリザベス・フライ（Mary Elizabeth Frye, 1905～2004）という女性が作詞したと考えられているが、その他にも起源はネイティブ・アメリカンだとする説もある⁵²⁾。1830年以降、アメリカ社会は、キリスト教的価値観一辺倒ではなく、多神教、あるいは汎神論的世界観をも受け入れる思想的な基盤が醸成されて来た。この歌に見られるアニミズム（精霊崇拜）的な死生観、世界観は、先住民の「宗教」が以来、徐々に浸透して行くのと軌を一にして、広まって行ったと考えることも出来るからである。その契機となったのが、超絶主義運動であった。

円環 サンダンスはセージの結界によって、内と外を峻別された円環内部の、聖なるグラウンドで行われる「聖なる祭典」である。ここでは、この円環の持つ意味から、サンダンスの特性を考えてみよう。

円環とは、「一つの固定した点（中心）から等距離（半径）にある点の均質の軌跡」（ルルカー 3）であり、最も単純にして、最も完璧な図形である。ジョルジュ・プーレ（1902～1991）は『円環の変貌』（1973）において「円環ほど完成した形は存在しない。またこれほど持続的な形も他に存在しない」（プーレ⁵³⁾）と述べている⁵³⁾。しかしプーレに先立つこと約百年、エマソン

50) Brahma. ヒンドゥー教の創造神。「梵天」と漢訳される。ウパニシャド思想の最高原理である「ブラフマン」（中性形）を神格化したもので、ブラフマーは男性形。ブラフマンからの宇宙創造説が有力になるにしたがって、抽象的な観念になじまぬ人々は、この中性原理を人格神に変える必要を感じたのであろう。かくてブラフマーは造物主とみなされ、初期仏教経典が成立したころには、世界の主宰神、創造神と一般に認められるようになっていた。しかしシバとビシュヌの信仰が高まるにつれて、ブラフマーの地位は下がり、両神のうちのいずれかの影響のもとに宇宙を創造すると考えられるようになり、両神のような幅広い信仰の対象となることはなかった。ブラフマーは水上で眠るビシュヌの臍から生えた蓮花から生まれるとされる（上村550）。

51) 原詩（決定版）は以下の通り。Do not stand at my grave and weep, I am not there, I do not sleep. / I am in a thousand winds that blow, / I am the softly falling snow. / I am the gentle showers of rain, / I am the fields of ripening grain. / I am in the morning hush, I am in the graceful rush. / Of beautiful birds in circling flight, / I am the starshine of the night. / I am in the flowers that bloom, / I am in a quiet room, / I am in the birds that sing, / I am in each lovely thing. / Do not stand at my grave and cry, / I am not there, I do not die. (URL: http://en.wikipedia.org/wiki/Do_not_stand_at_my_grave_and_weep)

52) “Frye is near universally cited as the author, … but other sources, including traditional native American origins, have been suggested over the years.”（同上）。

53) プーレによれば、円環は、古代、中世においてはアウグスチヌス（354～430）のいわゆる「中心が至るところにあり、円周がどこにもない一つの球体」としての《神》を表していたが、14世紀から16世紀にかけて、ルネッサンスの時代に《人間》をも表すようになった。さらに18世紀に至って《科学的知識》を指すようになった（プーレ37—38）と言う。

が夙に「人生は自己発展の環」(Emerson 280)であり、生成流転する自然界は「終わりがなく、あらゆる終わりが始まり」(Emerson 279)の「同心円からなる組織」(Emerson 266)である、と看破したように、《完璧さ》や《永遠》の象徴であるはずの円環も、「始めが終わり」という、もともと豊かな両義性を孕んでおり、不毛な堂々めぐり(悪循環vicious circle)など、様々なイメージの変容を伴っているのである⁵⁴⁾。

さて、一つの円が地面に描かれる。その結果、こうして外界に生じた外部と内部に対応して、《ウチ》と《ソト》という、^{コトバ}観念が我々の内界に発生する。いわば、コトバの魔力、観念の呪縛によって実体化され、符号化された、これら二つの部分は、さらに^{エスカレート}発展して、一般化、概念化される。すなわち、内部は、「安全、善」などを意味する、身内、ウチ(自家)、ムラなどの同質の共同体を代表し、一方、外部は、その内部とは截然として区別される、異質な部分の代表であり、円周から遠ざかるに従って「危険、悪」という度合いも増してくる。したがって、サンダンスの斎場である円形のグラウンドこそ、ラコタ(スー)社会という血縁・地縁からなる同質社会の永続、繁栄、安寧をワカン・タンカに向かって祈願する「聖なる祭典」に最も相応しい形状の場なのである。

中心の樹 多くの神話学者は、古代人が共通に持っていた世界観、宇宙観の例として、世界樹という存在を挙げている。彼ら古代人は頭上の天が落ちて来ないのは、実は「この世界の中央に一本の大きな木があって、空を支えている。この巨木は地中にもたくさんの根を張って、天上の枝とともに、大地を固めている」(中西7)からだと考えた。すなわち、古代人は、世界の中央に天と地と地下の三界を一本に繋ぐ大樹を想定し、それを宇宙樹とか、世界樹と名付けたのである。この樹は、世界中のほとんどの神話に登場するもので、例えば、フィンランドの叙事詩「カレワラ」やアイスランドの「エッダ」にはイグドラシルという大樹が存在するし、聖書の「生命の樹」もそうだ(プロス425)し、中国でも扶桑という木が東方にあって、その枝を伝わって太陽が昇るのだと考えられた。また、『古事記』の天の御柱もその変形と言えるし、また民話の「ジャックと豆の木」で、ジャックが伝って天に昇っていく豆の木もそうだと考えられる(中西8)。

ミルチャ・エリアーデは、その著『永遠回帰の神話』において、樹木の変形、あるいは樹木に代わる「中心のシンボリズム」として「1. 聖なる山 2. 寺院・宮殿、さらに拡大して

54) 現代の宗教や科学は、古代の呪術(magic)から発展して来たものであるが、呪術師が描く結界、すなわち、「魔法の環」(magic circle)に象徴される呪術は、善事(国家や人々の幸福・安寧)を目的に行われる「白魔術」と、悪事(仇敵の破滅や、不幸を祈願すること)を目的に行われる「黒魔術」の二種類があった。「聖なる環」とはむしろ、前者を示し、「悪しき円環」は後者を示す。修験道における加持祈祷や、陰陽道、密教においても、怨敵に危害を加えるのを目的とする「調伏法(呪詛の法)」(豊島6-7)があった。

聖都や王の住処 3. 大地の軸 (*axis mundi*), すなわち, 天, 地, 地下界の接合点」という三つを挙げている (エリアーデ²²)。これらもまた, 世界の中軸にあって世界を支える生命の根源として, 古代人の信仰の対象でもあったのである⁵⁵⁾。

これらの例から見る通り, ラコタの祭儀, サンダンスの円形斎場の中央における聖樹「白楊」は, 空と大地, 地下を結ぶ点において, まさに「世界樹」と言われるに相応しい内容を備えている。なぜなら, 事実, サンダンスは, 「白いバッファローの乙女」によって伝えられた, この部族の信仰の中心「七つの儀式」の, その核にも相当する重要な祭儀であるからだ。四つの風が吹く, 東西南北の四つの方角, さらに天と地という二つを加えた合計六つの方向が, ラコタで重要視されるが, 紐を仲介として聖樹に繋がれることによって, ピアサーは, このうちの二つ, 天と地とに接合される。これら, 四つの風, 聖樹, 天, 地から発する霊 (自然界のエネルギー) を一身に受けることによって, 彼らは再生を果たすわけでもあろう。

こうして, サンダンスはラコタの文化, 風俗, 道徳, さらに, その社会そのものを象徴するものであったために, 白人側のいかなる弾圧を受けても, 決して絶やされることなく, 秘かに継続されて行かなければならなかった。

砂絵 アメリカ西南部に位置するナバホ族の「砂絵」という祭儀にも, 同様のことが言われるであろう。この砂絵の中心に描かれる, 「花粉の道」, または「恵みの道」は, 巨大な玉蜀黍を昇って, 二人の女性精霊守護者のあいだを走っている。一方の側には, 男性的なジグザクの稲妻があり, 他方には, 女性的な虹の曲線が描かれている。上部には, 幸福の鳥がいて, 自由, 超越, 飛翔をあらわしている (クック33)。この玉蜀黍は, 生命の樹であり, 世界樹なのである⁵⁶⁾。誓願者がこの樹を辿って上部に到達したとき, 病は癒やされ, 再生を果たすという⁵⁷⁾。

自然尊重 「メインの森」にも開発の触手が伸びた, 1970年代のアメリカでの話である。伐採した森林の跡地を建設会社のブルドーザが均していたその時, 森の主, 熊の巣が破壊された。身の危険を感じた母熊は, 恐怖と動転の余り, 仔グマ数頭を置いて逃げ出してしまった。

55) 私はこれらに加えて, ヨーロッパの都市などで見るゴシック教会の「尖塔」も「中心のシンボル」= 世界樹の変形として列挙してもよいと思う。いずれにせよ, 古代人が世界の中心に存在すると想像した《世界樹》は「地球が自転する際の軸であり, 季節の移り代わりの原因となる, 地軸」 ([URL:http://wikipedia.org/wiki/地軸](http://wikipedia.org/wiki/地軸)) を無意識的に表現したものであろう。なお, この地軸は公転面の法線 (垂直軸) に対して23.4度の傾斜をもって南北両極を貫いていると想定される。

56) Ⅷの図19参照。

57) 「クンダリーニ・ヨガとして知られるインドのヨーガの一派では, 人間の身体はミクロコスモスであり, 脊柱は世界軸なのである。蛇 (クンダリーニ) として描かれる生命力は性と密接にかかわっており, 《脊椎の樹》の根もとで眠るのである。ヨーガ行者の仕事はこの眠れる力を目覚めさせ《脊椎の樹》を昇らせることである。霊的中枢 (チャクラ) を通り抜け, 最後に, 頭の頂きにあって1000の花弁をもつ蓮であらわされるサハスラーラ・チャクラから放たれる」 (クック125)。Ⅷの図20参照。

ブルドーザの運転手はその処置に困り、結局、仔グマたちを引き取って育てることにした。これは実に象徴的な出来事ではないか。今や「文明」という名のブルドーザ（村上陽一郎93）が、地球上を掻き廻し、引っ掻き廻して、自然環境を根こそぎ破壊しようとしているのだから。

都市文明が誕生したのは、今から一万年、農耕牧畜文化が始まってからとされる。それまで、人類は長い間、旧石器時代と呼ばれる中で狩猟採集の生活を営んでいた。

今日、ほぼ定説ともなっているこの見解はしかし、あくまで、先史時代のことであり、記録はおろか、その正しさを証明する考古学的な証拠もない。だが、紀元前5,000年頃に成立した次の神話は、あるいはそれを補強する根拠となるかも知れない。『ギルガメッシュ』叙事詩に登場する、「シュメール王、ギルガメッシュによって殺される森の神、フンババの話は、実は都市文明の興りを語っている」（梅原¹³⁴134）と見ることが出来る。「都市文明の建設」は「森の神の殺害の歴史の上に築かれてい」て、「自然神、動物神、植物神」は「人間の開発を妨げるものとして殺されてい」った（同上）からである。

いずれにせよ、都市文明の勃興とともに、豊穡神を崇敬する多神教、もしくは、シャーマン⁵⁸⁾が、自然界に遍在する「霊的存在」（精霊や死霊など）との交流を通じて治病行為を行う《シャーマニズム》に代わって、キリスト教やイスラム教などの超越神や人格神を奉じる一神教が出現した。同時に、人間は自然を破壊し始め、森の中に棲む神々を放逐した（安田118-138;209）という訳だ。こうして、初期のキリストがローマ帝国の国教（392年）となり、ヨーロッパを席捲して行く過程において、かつてはヨーロッパ全土を覆っていた森は破壊され、森の宗教（ドルイド教）もまた征服され、駆逐されていった。さらには、ルネッサンスから近世にかけては、当初、キリスト教内の異端審問裁判から始まった宗教裁判が、異教徒を巻き込む魔女狩り、魔女裁判へと発展し、こうしてシャーマン的な呪術師（「賢い女性」、産婆、「天候魔女」）など、すべてが伝説上の「魔女」と混同されて、迫害され、絶滅寸前の状態にまで追い込まれた（上山224—238）のである。

この自然を敵視するキリスト教に裏打ちされた、近代科学が、殊に産業革命以降、自然破壊を推し進めて、今日の地球大の公害をもたらしたことは、もはや定説にもなっている。「黒い

58) 「最古のシャーマニズムは蛇を使った占いであった」（吉野165）らしい。日本では「蛇巫女」と呼ばれた女性が存在したことは土偶で確認されているし、ギリシャでも「クレタ島のクノッスス宮殿で蛇を飼育した蛇巫女像が発掘されている」（Hutchinson 208）。この蛇を持つ「女神像」は大地の豊穡に関係する、いわゆる「大地母神」あるいは「太母」（グレート・マザー）と呼ばれる女神で、おそらく、人類の最古の信仰を示していると思われる。ところが、紀元前1000年～1500年前後の大きな気候変動で、人類は蛇信仰を中心とする豊穡女神を捨てて、農作物に成長をもたらす恵みの雨や嵐を支配する天候神、ヤーヴェやバルなどの「男神」を信仰するようになった（安田97; 100—101）と言う。それ以来、大地の豊穡と同一視された女性の持つ神秘的な出産力は、多情で淫乱な娼婦性として貶しめられて、同時にメドューサなどの豊穡女神は、醜く恐ろしい「魔女」に変えられた。大胆に憶測するなら、豊穡神、シャーマン、（そして魔女）は、ほぼ同じルーツを持っているのではないか。

森」(シュヴァルツ・バルト)の針葉樹林など、童話や伝説でお馴染みの西南ドイツの森も近年、公害(酸性雨)によって「白骨林」と化したほどである。森の再生は、単に自然の回復のみでなく、殺戮され、放逐された神々の復活にも繋がってくる重要な意味を持っている。それはキリスト教の行き過ぎた「人間中心主義」を修正し、自然に対する優しい思いやりを持った「自然宗教」(アニミズムやシャーマニズム)を見直す契機にもなるであろう。

成程、ラコタにおいても、サンダンスの斎場、その中央に立てる白楊は、毎年伐採を繰り返している。しかしそれは一本のみで、しかも、「トゥリー・デイ」(Tree Day)の項目でも詳述したように、メディスン・マンはまず、聖なるパイプを押し当て、樹の霊に向かって許しを乞わねばならない⁵⁹⁾。しかも、ただやみくもに伐採するのではなく、伐られた樹木の周囲には、既に何本かの若木が植えられてもいたのである。

エコロジーのチャンピオン 「自然環境の中では、あらゆる動物も植物もその、それぞれの種が互いに影響を与えながら生態系を形成している」とする「生態学」(ecology)という現代の最先端を行く「科学」思想は、人間と同じように、切り倒された森の木にも痛みがあり、汚された川や海もまた悲鳴を上げていると考える、豊かな想像力に裏打ちされた「アニミズム」や、シャーマニズムと何と似通っていることか。この最も新しい「エコロジー」の思想と、人類最古からの「森の宗教」とが合体した、古くて新しい「思想」(「宗教」)が、今一番必要とされているのではあるまいか(神徳67)。

自然に向けるラコタ(先住民)の人々の「眼差し」は優しい⁶⁰⁾。この「優しさ」は白楊に真っ先に斧を当てた子供たち、さらにはその子供たちへも受け継がれて、「民族の環」を形成し、やがてそれは、国境を越えて、自然破壊を押し止める、さらに大きな「連帯の環」⁶¹⁾へと発展して行くことであろう。

59) アイヌの「イオマンテ」(熊祭り)も、熊の肉をいただく代わりに、その魂をあの世界に向かって送り届ける儀式である(梅原² 25-27)。

60) 先住民は狩りをして乱獲は慎んだ。「自然の威力はある程度まで、擬人化され、そのため自然界の生物が故意に傷つけられると、彼らは復讐した。一例として、食物としてサケを捕ったとする。サケの霊も川の霊もこのことを気にしない。サケはそのためにいたのだ。しかし、もしも人々が必要とした以上に捕まえ、あとでその魚を捨てたり、あるいは捕まえたサケを不注意から苛めたりしたら、霊界からの報復があるものと思わなければならなかった。これはしばしば、火山の噴火のかたちで起こった」(パーランド53-54)。

61) それはラコタの人々が唱える“ミタクエ・オヤシン”の思想のシンボル、「癒しの輪」(medicine wheel)でもある。Ⅷの図21参照。

Ⅶ 参考文献（*印は拙論で引用したもの）

1. 和書（アイウエオ順）

- *阿部珠理¹『アメリカ先住民の精神世界』NHKブックス, 1994, 1995年
- *————²『アメリカ先住民—民族再生に向けて』角川書店, 平成17年
- *石川栄吉他『文化人類学事典』弘文堂, 昭和62年
- *ウイルソン, エドモンド『森林インディアンイロクォイ族の闘い』村山優子, 思索社, 1991年
- *上山安敏『魔女とキリスト教—ヨーロッパ学再考』人文書院, 1993, 1995年
- *梅原 猛¹『森の思想が人類を救う』小学館, 1991年
- *————²『日本人の「あの世」観』中公文庫, 1993年
- *エマソン, ラルフ・ウォルドー『エマソン論文集下』酒本雅之訳, 昭和48年
- *エリアーデ, ミルチャ¹『永遠回帰の神話』堀一郎訳, 未来社, 1963, 1981年
- *————²『シャーマニズム—古代的エクスタシーの技術』堀一郎訳, 昭和49年
- *学研編『ヒンドゥー教の本』Books Esoterica—12, 1995年
- *クック, ロジャー『生命の樹—中心のシンボリズム』イメージの博物誌—15, 植島啓司訳, 平凡社, 1982, 1995年
- *神徳昭甫¹『日米文学の中の「生」と「死」—アニミズムの復権—』近代文芸社, 1998年
- *————²「恐山のイタコ：報告と考察—闇の中の開眼—」『富山大学人文学部紀要第24号』2006年8月, 55—70
- *祖父江孝男「スー族」『文化人類学事典』弘文堂, 昭和62年, 452
- *斎藤光『超越主義』アメリカ古典文庫—17, 研究社, 1975, 1991年
- *佐々木宏幹『シャーマニズム—エクスタシーと憑霊の文化』中央公論社, 昭和62年
- *ジェニングズ, ゲリージ『黒魔術と白魔術—エピソード魔法の歴史—』市場康男訳, 現代教養文庫, 1979, 1988年
- *タイラー, E. B.『原始文化』比屋根安定訳, 誠信書房, 昭和37年
- *豊島泰国『図説日本呪術全書』原書房, 1998, 2001年
- *富田虎男『アメリカ・インディアンの歴史』雄山閣, 昭和57年, 平成6年
- *中西進『古代日本人の宇宙観—NHK人間大学テキスト』NHK出版, 1994年1月～3月
- *仁戸田六三郎『宗教学概論』稲門堂, 昭和三十八年, 四十四年
- *ハーツ, P. R.『アメリカ先住民の宗教』西本あずさ訳, 青土社, 2003年
- *バーランド, C.『アメリカ・インディアン神話』松田幸雄訳, 青土社, 1990年
- *プーレ, ジョルジュ『円環の変貌』上下, 国文社, 1973年（上巻）, 1974年（下巻）
- *ブロス, ジャック『世界樹木神話』藤井史郎他訳, 八坂書房, 1995年
- *ヘーゲル, ヴィルヘルム『宗教哲学』木場深定訳, 中巻の一（昭和30年）, 二（昭和32年）,

下巻の一（昭和47年），岩波書店

- *本田勝一『アイヌ民族』朝日新聞社，1993年
- *ムーニー，ジェイムズ『ゴースト・ダンス』荒井芳廣訳，紀伊国屋書店，1989年
- *村上重良『日本宗教学事典』講談社学術文庫，昭和63年
- *村上陽一郎『文明のなかの科学』青土社，1994年
- *安田喜憲『蛇と十字架—東西の風土と宗教』人文書院，1994,1995年
- *ルルカー，マンフレット『象徴としての円—人類の思想・宗教・芸術における表現』叢書，
ユニベルシタス342，竹内章訳，法政大学出版会，1991年
- *吉野裕子『蛇—日本の蛇信仰』法政大学出版会，1979年
- *渡辺利雄「超絶主義」『日本大百科全書15』小学館，1987，1995年

2. 欧文のもの（アルファベット順）

- *Bonvillain, Nancy. *The Teton Sioux, Indians of North America*, Chelsea House Publisher, New York, 2005
- *Black Elk¹, *Black Elk Speaks, Being the Life Story of a Holy Man of the Oglala Sioux as told through John G. Neihardt*, Introduction by Vine Deloria, Jr., University of Nebraska Press, 1932, 1961, 1979, 1988
- ²*The Sacred Pipe, Black Elk's Account of the Seven Rites of the Oglala Sioux*, Recorded & edited by Joseph Epes Brown, University of Oklahoma Press, Norman, 1953, 1989
- *Emerson, Ralph Waldo, *The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson* edited by Brooks Atkinson, The Modern Library, Random House, New York, 1968
- . *Essays, First Series, Vol. II of Centenary Edition, The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, With a Biographical Introduction and Notes by Edward Waldo Emerson and a General Index, Houghton, Mifflin and Company, The Riverside Press, Cambridge, 1904, Reprinted by AMS, New York, 1979
- *Emerson, Edward Waldo, “Notes” in *Essays, First Series, Vol. II of Centenary Edition, The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, With a Biographical Introduction and Notes by Edward Waldo Emerson and a General Index, Houghton, Mifflin and Company, The Riverside Press, Cambridge, 1904, Reprinted by AMS, New York, 1979, 373—445
- *Gibbon, Guy. *The Sioux, the Dakota and Lakota Nations*, Blackwell Publishing, Malden, MA 2003
- *Glover, John Henry, *Tribal Sovereigns of South Dakota, A Description of Contemporary*

- Sioux Governments*, Published by Chiesman Foundation For Democracy, 2005
- *Eliade, Mircea, *Shamanism, Archaic Techniques of Ecstasy*, translated from the French By Willard R. Trask, Bollingen series LXXVI, Princeton University Press, 1972, 1974.
- Hand, Floyd Looks for Buffalo, *Learning Journey on the Red Road*, edited by Marc Alexander Huminilowycz, Poduced by Warren Washer, Printed and bound in Canada, 1998
- Hultkrantz, Ake, *The Religions of the American Indians*, translated Monica Setterwall, University of California Press, Berkley, Los Angels, London, 1979 San Francisco, 1978, 1998
- *Hutchinson,, R.W. *Prehistric Crete*, Penguin Books, Baltimore, Maryland, 1962
- *Mails, Thomas E. *Sundancing, The Great Sioux Piercing Ritual*, Council Oak Books, Tulsa OK. 74126, 1978, 1998.
- **New Lakota Dictionary*, Lakota Language Consortium, Bloomington, 2008
- *Poule, Georges, *The Metamophoses of the Circle*, translated from the French by Carley Dawson and Elliot Coleman in collaboration with the Author, The John Hopkins University Press, Baltimore, Maryland, 1966
- *Powers, William K., *Oglala Religion*, University of Nebraska Press, Lincoln/London, 1975, 1977, 1982
- Ross, A.C., *Mitakuye Oyasin, "We are all related"*, Published by Bear, Denver, 1989,1992
- Ruoff, A. LaVonne Brown, *American Indian Literatures, An Introduction, Bibliographic Review, and Selected Bibliography*, The Modern Language Association of America, New York, 1990
- Stolzman, FR. William. *How to Take In Lakota Ceremonies*, Tipi Press, St. Joseph Indian School, Chamberlain, SD, 1986, 2004
- Theisz, R.D. ed., *Buckskin Tokens, Contemorary Oral Narratives of the Lakota*, Sinte Gleska College, Rosebud, S.D. 1975.
- Tylor, E.B. *Primitive Culture*, London, John Murray, Albermarle Street, 1920.
- *Walker, James R¹. *The Sons of the Wind, The Sacred Stories of the Lakota*, edited by D. M. Doorings, University of the Oklahoma Press, Norman, 1984
- ²*Lakota Myth*, edited by Elaine A. Jahner, Introduction to the New Bison Books Edition by Raymond J. Demallie, University Press, Lincoln and London, 1983, 2006

VII 附録



図15 サンダンスにおけるピアシングの一例
(Mails. P.77)



図16 サンダンスにおける女性の服装



図17 バッファローの頭蓋骨

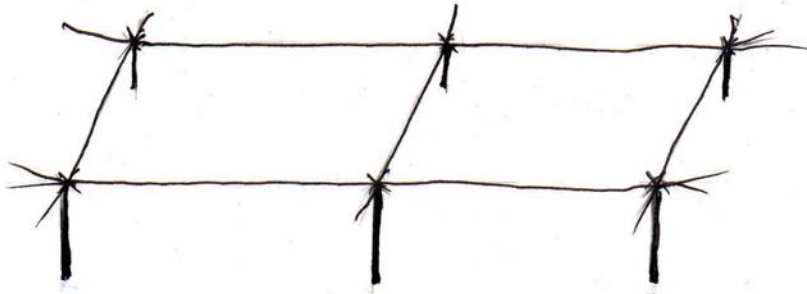


図18 ユウイピで使われる木杵

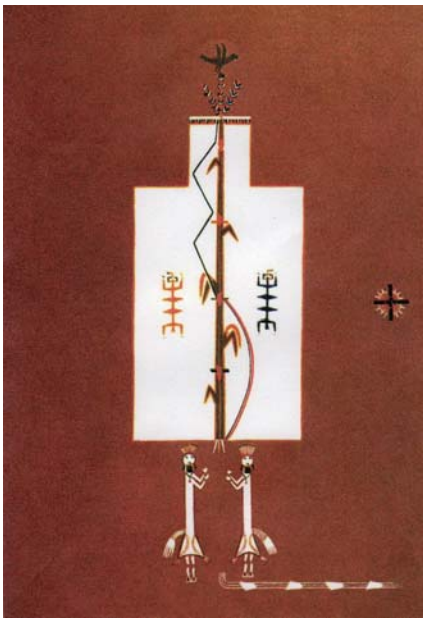


図19 ナバホの砂絵 (クックp.33)

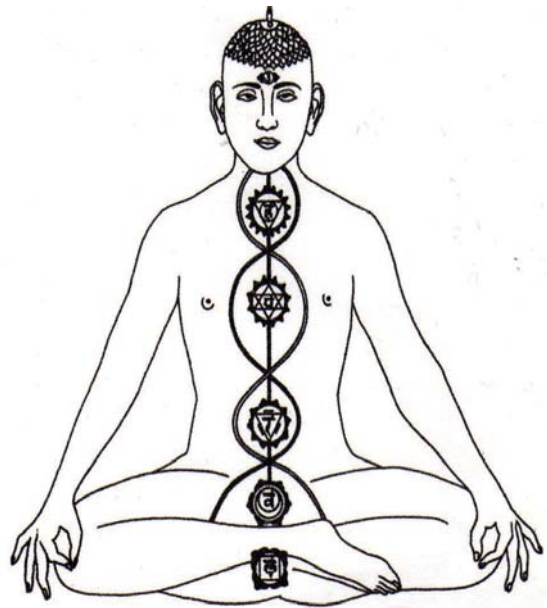


図20 クンダリーニ・ヨガ (クックp. 125)



図21 メディスン・ホイール